秋田県文化財調査報告書第204集

秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

―大沢遺跡・松館遺跡―

1991・3

秋田県教育委員会

秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

— 大沢遺跡・松館遺跡 —

1991・3

秋田県教育委員会

序

秋田県には先人の残した多くの文化財が残されています。これらの文化遺産は現代に生きる私たちの責任で保護し、未来に継承していくべきものであります。

このほど建設省東北地方建設局秋田工事事務所により、秋田市上北手から昭和町豊川に至る秋田外環状道路建設事業が計画されました。この工事は周知の遺跡である大沢遺跡および松館遺跡にかかることが判明し、工事に先立って発掘調査を実施いたしました。

その結果、平安時代の竪穴住居跡や中世の火葬墓などが検出され、大きな成果を上げることができました。

本書はこの成果をまとめたものでありますが、県民各位の文化財に対する御理解と歴史研究の上でいささかでも役立てば幸いと存じます。

最後になりましたが、建設省東北地方建設局秋田工事事務所、秋田市教育委員会、昭和町教育委員会ならびに地域住民の皆様など、調査にあたり御指導、御協力下さった多くの方々に対し厚く御礼申し上げます。

平成３年３月５日

秋田県教育委員会
教育長　橋本　顕信

例　言

1. 本報告書は、秋田県教育委員会が主体となって調査を行った秋田外環状道路建設事業に係る大沢遺跡・松館遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書の編集は、大野憲司・庄内昭男が行い、大沢遺跡の執筆は大野憲司が、松館遺跡の執筆は庄内昭男が行った。
3. 放射性炭素の年代測定は、学習院大学に依頼し、結果を本報告書46頁に記した。
4. 本報告書に掲載した2万5千分の1・5万分の1の地形図は、建設省国土地理院発行の地形図を複製したものである。
5. 遺跡における層相の色調観察は、小山・竹原著『新版　標準土色帖』（1973）を使用した。

凡　例

1. 本報告書の挿図ならびに図版は、次の要項に従って作成されている。

1）遺構の記述について

遺構実測図は、構成上不定縮尺である。

遺構実測図の中の矢印は、国家座標第X系座標北をしめす。

土坑・火葬墓については、（　）内が現場での注記番号であり、本書では新たな番号をつけて編集した。

2）遺物の記述について

本報告書に掲載した遺物は、発掘調査によって得た資料のすべてではない。

実測図は次の縮尺に統一してある。

《大沢遺跡》

［土器］土器：1／3、土器拓影：1／3

［石器］打製石器：1／2、磨製石器・礫石器：1／3

写真図版は実測図の縮尺に従った。

《松館遺跡》

［土器］土器拓影：1／3

［石器］石鏃・石匙・石箆・打製石斧・剥片石器：1／2、・扁平打製石器：1／3

写真図版の縮尺は、石鏃・石匙を2／3とした他は、実測図と同じである。

目　次

序 i
例言・凡例 ii
目次・挿図目次・図版目次 iii・iv
はじめに …… 1
調査に至る経過 …… 1
調査要項 …… 1
遺跡周辺の地形 …… 3
周辺の遺跡 …… 4

《大沢遺跡》
第1章　遺跡の概要 …… 7
第1節　遺跡の概観 …… 7
第2節　調査の方法 …… 9
第3節　調査経過 …… 10
第2章　調査の記録 …… 12
第1節　検出遺構と遺物 …… 12
第2節　その他の出土遺物 …… 15
第3章　まとめ …… 24

《松館遺跡》
第1章　調査の概要 …… 31
第1節　遺跡の概観 …… 31
第2節　調査の方法 …… 31
第3節　調査日誌 …… 32
第2章　調査の記録 …… 35
第1節　調査区の地形と層位 …… 35
第2節　検出遺構と出土遺物 …… 35
第3章　まとめ …… 45

挿図目次

第１図　遺跡周辺の地形分類 ……3
第２図　周辺の遺跡分布 ……5
第３図　大沢・松館遺跡位置 ……6

《大沢遺跡》

第４図　遺跡周辺の地形と工事計画図
及び調査区 ……8
第５図　基本土層図 ……9
第６図　グリッド及び遺構配置図……11
第７図　ＳＩ01竪穴住居跡……13
第８図　ＳＩ01竪穴住居跡出土土師器……14
第９図　遺構外出土土器（１）……17
第10図　遺構外出土土器（２）……19
第11図　遺構外出土石器（１）……20
第12図　遺構外出土石器（２）……21

《松館遺跡》

第13図　調査区域及び
グリッド配置図 ……33･34
第14図　第１号土坑 ……35
第15図　第1～４号火葬墓……37
第16図　出土遺物－土器－……38
第17図　出土遺物－石器１－……40
第18図　出土遺物－石器２－……41
第19図　出土遺物－石器３－……42
第20図　出土遺物－石器４－……43
第21図　石器類出土地点図……44

図版目次

図版１　１　遺跡遠景
２　遺跡全景
図版２　１　遺跡全景
２　調査区全景
図版３　１　ＭＨ48グリッド周辺の縄文時代
出土遺物状況
２　ＳＩ01竪穴住居跡
図版４　１　ＳＩ01竪穴住居跡
遺物出土状況
２　ＳＩ01竪穴住居跡
出土土師器
図版５　その他の出土遺物－土器－
図版６　その他の出土遺物－石器－

図版１　遺跡遠景
遺跡遠景
図版２　調査前の状況
調査後の状況
図版３　東西土層ＭＡ50グリッド付近
調査区東斜面調査状況
ＭＣ35グリッドトレンチ
図版４　南端火葬墓群発掘状況
第１号火葬墓確認状況
第１号火葬墓断面
図版５　第２号火葬墓断面
第２号火葬墓完掘状況
第３号火葬墓確認状況
図版６　出土遺物－土器・石器－
図版７　出土遺物－石器－
図版８　出土遺物－石器－

はじめに

調査に至る経過

秋田外環状道路は、秋田市内の交通混雑の解消をはじめ、交通量の増加にともなう国道沿線の生活環境の改善等を目的として、建設省東北地方建設局秋田工事事務所から計画が提出されたものである。

昭和61年４月には、秋田市上北手古野から昭和町豊川龍毛にかけて26.2kmの路線が決定された。その路線決定にしたがって、秋田県教育委員会では、ルート上での遺跡分布調査および範囲確認調査を継続的に行い、その結果６ケ所の遺跡を確認した。

本報告書にとりあげる大沢・松館は秋田市北部で確認された遺跡で、平成１～２年にかけて発掘調査を実施したものである。

調査要項

１．大沢遺跡

遺跡名称	大沢遺跡　※遺跡記号　５ＯＳ
所在地	秋田県秋田市金足岩瀬字大沢92－58外
遺跡状況	山林
調査対象面積	900m²
調査面積	600m²
遺跡性格	縄文時代遺物散布地、平安時代集落
遺跡時期	縄文時代、平安時代、中世
調査目的	秋田外環状道路建設事業にかかる事前調査
調査期間	平成元年10月４日～11月10日
調査主体者	秋田県教育委員会
調査員	大野 憲司（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
	安田 忠市（秋田市教育委員会主事）
調査総務担当	佐田　茂（秋田県埋蔵文化財センター主査）
	高橋忠太郎（秋田県埋蔵文化財センター主事）
調査協力機関	建設省東北地方建設局秋田工事事務所
	秋田市教育委員会
	昭和町教育委員会

2．松館遺跡

遺跡名称	松館遺跡　※遺跡記号５ＭＤ
所在地	秋田県秋田市金足岩瀬字松館29－10外
遺跡状況	山林・畑地
調査対象面積	5,200㎡
調査面積	2,100㎡
遺跡性格	遺物散布地、墓地
遺跡時期	縄文時代、中世
調査目的	秋田外環状道路建設事業に係る事前調査
調査期間	平成２年５月14日～７月10日
調査主体者	秋田県教育委員会
調査員	庄内 昭男（秋田県埋蔵文化財センター文化財主査）
	小林　克（秋田県埋蔵文化財センター文化財主事）
	斎藤 典芳（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
調査総務担当	佐田　茂（秋田県埋蔵文化財センター主査）
	高橋忠太郎（秋田県埋蔵文化財センター主事）
調査協力機関	建設省東北地方建設局秋田工事事務所
	昭和町教育委員会

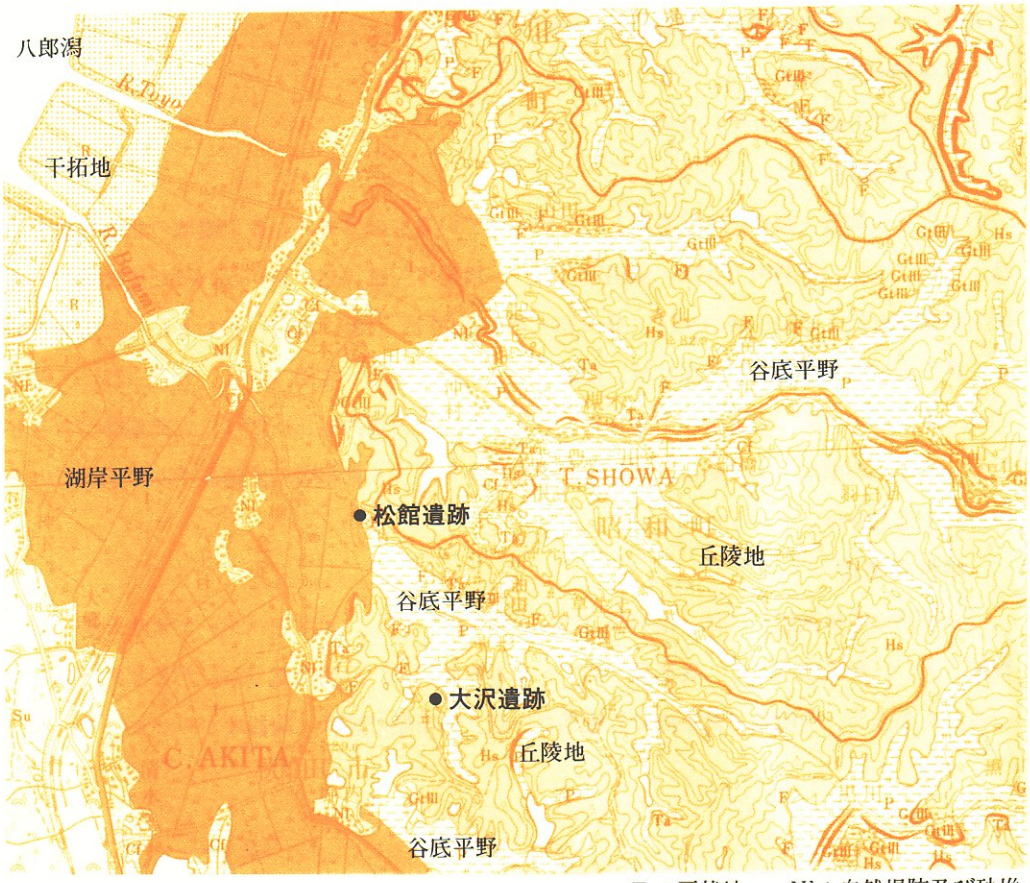
遺跡周辺の地形

大沢遺跡は北緯39°50'40"・東経140°4'48"、松館遺跡は北緯39°51'12"・東経140°4'31"にあたる。

大沢・松館遺跡の位置する日本海に沿った秋田県中央部の地形をみると、八郎潟周辺低地・標高100m前後の丘陵地・標高200m以上の山地に分けられる（秋田県：1973）。

南西部には、海岸にほぼ平行に標高20m前後の海岸砂丘が発達しており、その内側に海抜10m以下の八郎潟干拓低地が開けている。低地の東には標高50～100mの丘陵地が南北の帯状に発達している。丘陵地のさらに東には、本地域の最高点である721.5mの俎山を主峰とする火山岩地が南北に走っている。その山地および丘陵地に源を発する鯉川・馬場目川・井川・豊川および馬踏川の5河川はすべて八郎潟に注いでいる。

大沢・松館遺跡は、標高50mの丘陵地先端に位置し、北を豊川、南を馬踏川が流れている。



F：扇状地　Nl：自然堤防及び砂堆
Gt：砂礫段丘　Cf：人工改変地
Ta：崖錐及び土石流

第1図　地形分類

周辺の遺跡

ここでは、大沢遺跡および松館遺跡の歴史的環境を理解するために、八郎潟南東部の豊川・馬踏川流域の遺跡について概観したい。

第2図は、大沢・松館遺跡を含む八郎潟南東部の遺跡群を秋田県遺跡地図（秋田県教委：1990）に基づいて作成したものである。

縄文時代の遺跡

いずれも縄文土器の散布地として知られているものである。豊川流域の北岸に松葉沢（1）、西野（2）、千刈田（3）がある。豊川および馬踏川にはさまれた舌状台地先端には元木山Ⅰ・Ⅱ（4・5）があり、その東側豊川油田周辺にも、鳥巻Ⅰ・Ⅱ（6・7）、上松館（8）、真形尻（9）、草土沢（10）遺跡の所在が知られている。とくに真形尻は、天然アスファルト層一五尺下からシカの角と頭骨、マンモス象の歯、鳥骨、クルミ、土器がみつかり、縄文時代のアスファルトの供給に関わる遺跡として注目されている。

弥生時代の遺跡

現在のところ確認されていない。

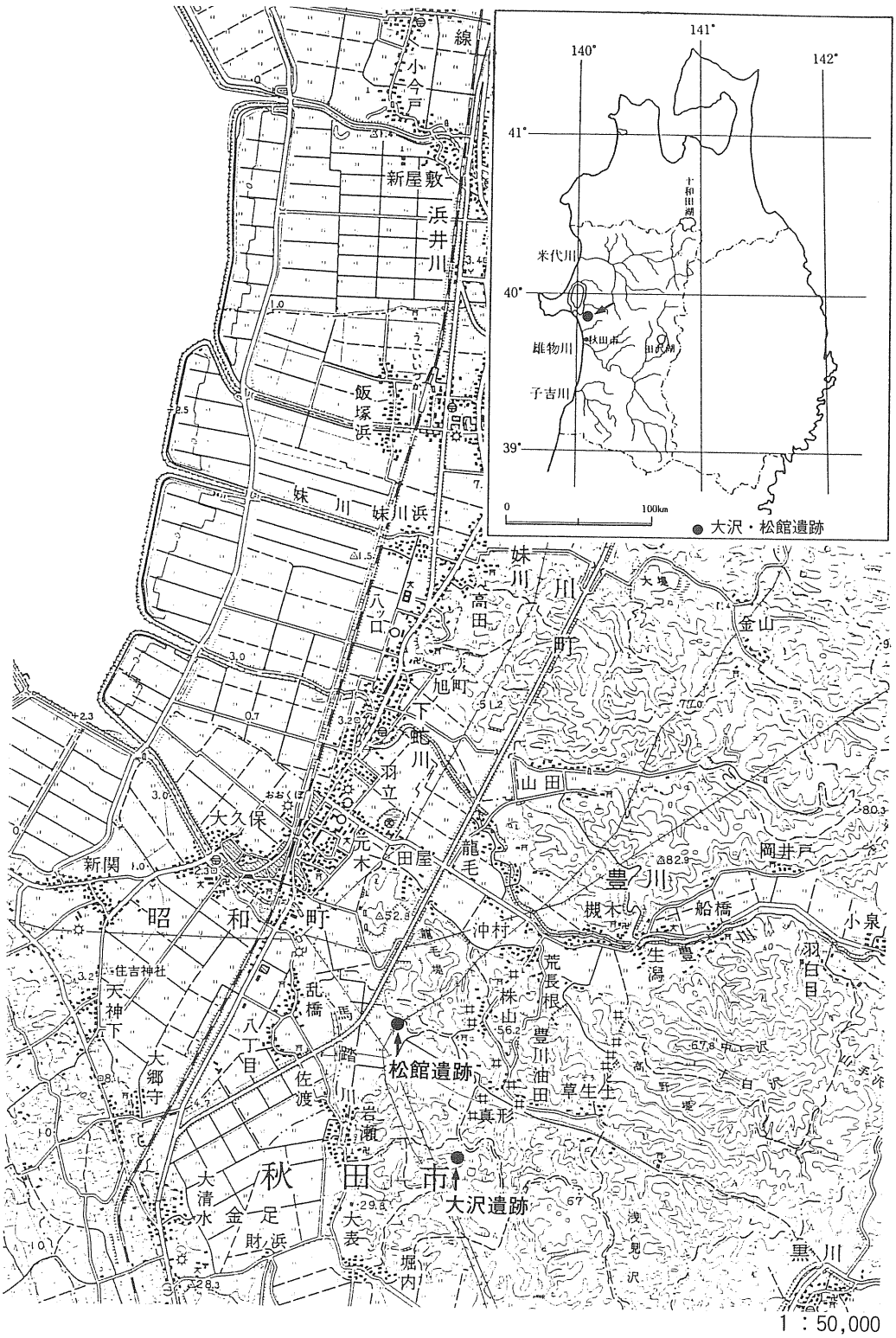
古代の遺跡

いずれも土師器・須恵器の散布地として知られているものである。豊川流域の北岸台地上には、西野（2）、千刈田（3）、深田沢（11）、塔田Ⅰ～Ⅲ（12～14）といった遺跡群がある。さらに南岸台地上には、正戸尻Ⅰ・Ⅱ（16・17）、白寸沢（18）、高野（19）といった遺跡がある。秋田市岩瀬地区馬踏川北岸には、前山Ⅰ・Ⅱ（20・21）、北田（22）、大表（23）、堀内（24）、草土沢Ⅰ（25）の各遺跡が知られている。豊川塔田地内（15）では、火葬墓群があるとしているが、詳細は不明である。昭和町乱橋地区から5～6世紀頃の土師器がみつかっているが、出土地点がはっきりしていない。

中世の遺跡

『秋田県の中世城館』には、山田館（26）、極楽館（27）、元木館（28）オオサカ館（29）、槐館（30）、岩瀬館（31）、真形館（32）、よもみ館（33）、堀内館（34）がとりあげられている。そのうち、堀内館、真形館で五輪塔の一部、山田館で焼米・陶器片がみつかっている。

第２図　周辺の遺跡分布　　1：25,000


141°
140°
142°
41°
40°
39°
十和田湖
米代川
雄物川
秋田市
田沢湖
子吉川
0
100km
大沢・松館遺跡
線
小今戸
新屋敷
浜井川
飯塚浜
妹川
妹川浜
八ッ口
高田
妹川
川
町
大堤
金山
旭町
下蛇川
羽立
山田
大久保
元木
田屋
龍毛
豊川
岡井戸
新関
昭和町
槻木
船橋
小泉
沖村
荒長根
生潟
羽白目
住吉神社
天神下
乱橋
八丁目
株山
豊川油田
草生
大郷守
佐渡
松館遺跡
真形
岩瀬
秋田市
大沢遺跡
大清水
金足
財浜
大表
堀内
黒川
1：50,000

第3図　遺跡位置

Ō SAWA
大沢遺跡

第１章　遺跡の概要

第１節　遺跡の概観

１　遺跡の立地

大沢遺跡は、秋田市の北端、昭和町との境界近くに所在し、ＪＲ奥羽本線大久保駅の南東約3.9km、北緯39°50′40″、東経140°4′48″に位置する（第４図）。

太平山地から北西に延びる俎山山地の西側は、高度100m内外の等頂丘陵面をなす丘陵地が広がり、西側ほどその高度を減じて、西端部での標高は50m前後である。これらの丘陵地の表層地質は、ほとんどが砂質泥岩あるいは砂礫層からなっているため、西流する中小の河川などによる開析が著しく、丘陵地は大小の沢筋が入り込んで枝状を呈している。

大沢遺跡は、上記丘陵地の西端部、東西を沢筋によって挟まれた北向きの緩斜面に立地している。調査の対象となったこの緩斜面は、全体でも南北約40m×東西約50m（調査区は南北約40m東西約30m）の広さしかなく、平坦面は少ない。調査区の標高は10～16mで、周囲の水田との比高差は３～８mである。遺跡の東西に入り込む沢筋は、その奥部が沼地になっており、水田開発が進む以前には湿地であったと見られる。なお、遺跡付近は豊川油田の南西端部にあたり、現在でも採油用井戸が散在している。

遺跡の調査前の状況は、畑地・植生された杉林及び道路であった。調査区は、畑地造成のための削平、採油の際の泥等の沈澱場造成、台地上方に至る道の開削などにより、原地形が相当に変えられている。

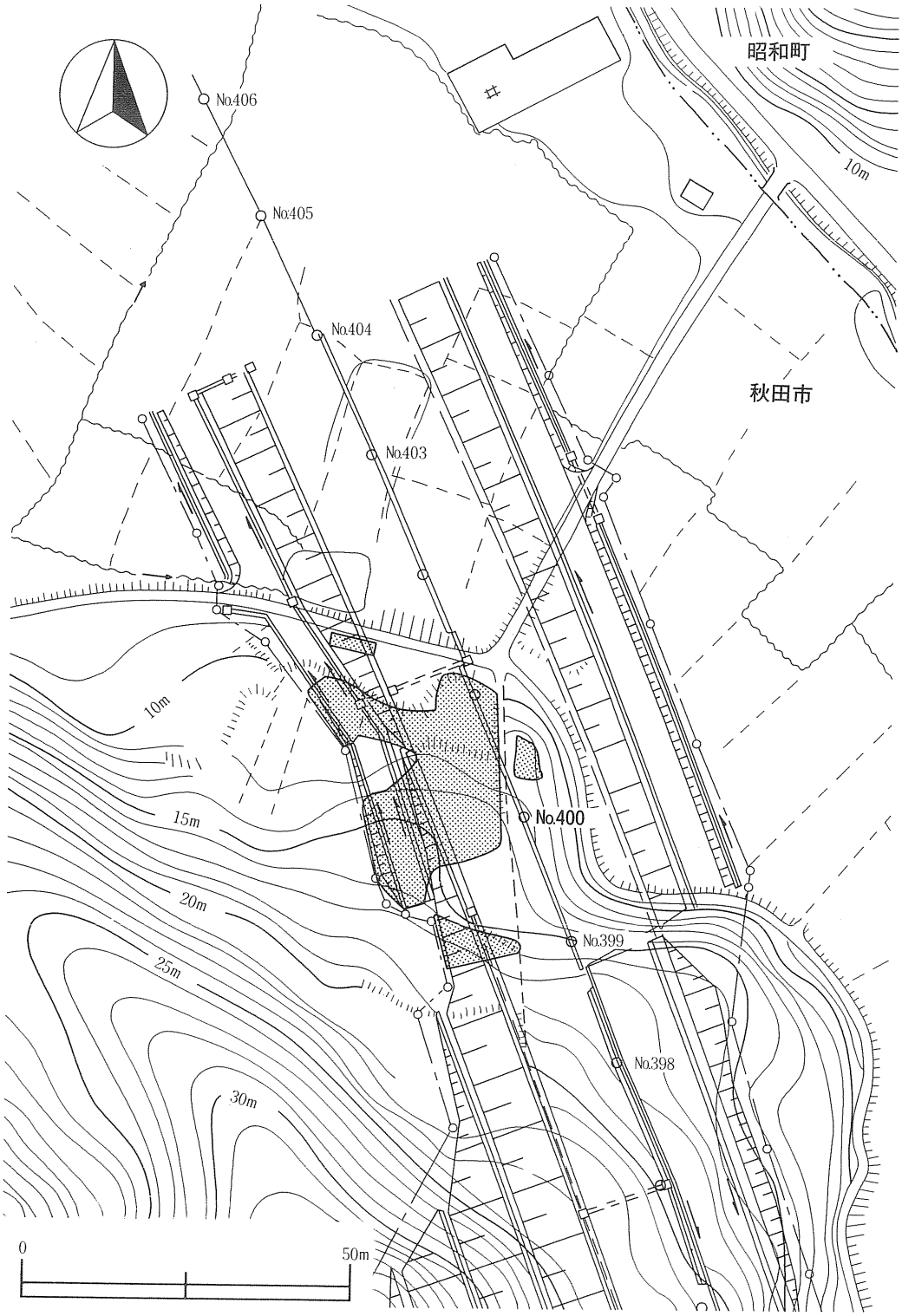
２　基本土層

第５図が、調査区最高部における土層断面図である。採図の位置は、MI49グリッド、MG51～MH51グリッドで、各々第４図のＡ－Ｂ、Ｃ－Ｄである。MG51～MH51グリッドでは、既に第１層の全てと第２層の大部分を除去した後の土層図であり、MI49グリッドでは、耕作などによって第２層と第３層の一部が失われている。

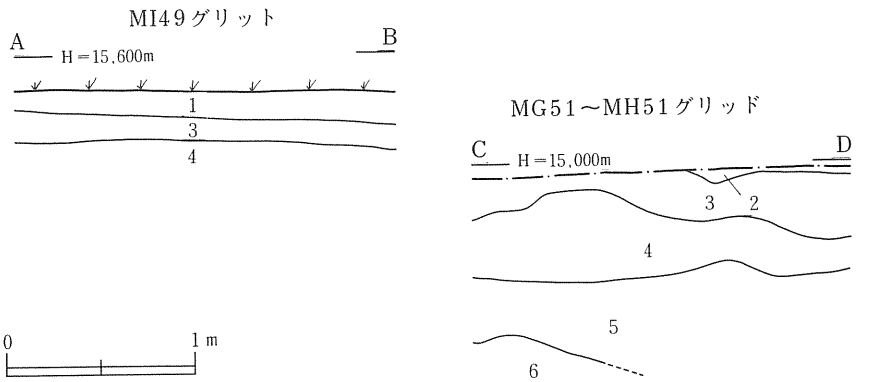
第１層は、黒褐色（2.5Y3/2）砂質の耕作土である。全体が攪乱を受けており、微量の遺物と木炭片及び３層の黄褐色砂質土粒子を含む。層厚は、約20～40cmである。

第２層は、黄褐色（10YR5/6）砂質土と褐色（7.5YR4/4～10YR4/4）土の混土で、３層への漸移層に当たる。層厚は10cmで、畑地であった部分では既に失われていることが多い。

第３層は、黄褐色（10YR5/6）砂質土で、縄文時代の遺物の大部分は本層から出土する。本層と第４層の層界は不明瞭で、波打っているように見える。層厚は、20～40cmである。本層は



第４図　遺跡周辺の地形と工事計画図及び調査区（スクリーントーン部分）



第５図　基本土層図

当初、その色調から地山土と思われたが、縄文時代の遺物包含層であることが分かり、更に深掘りして地山土を検出しようとしたが、結果的には以下の４～６層までのうち、いずれが地山土に相当するかは不明のままである。

第４層は、色調が第３層と同じであるが、３層よりも堅くしまっていることから分層した。本層の上部からも剥片・チップ等が出土する。第５層との層界も大きく波打っており、層厚は20～80cmである。第５層は、黄褐色(10YR5/6）～褐色（10YR4/6）の砂質土で、鉄分を含み３・４層よりも褐色がかっている。第６層は、弱い粘性のある明褐色（7.5YR5/8）砂層である。

３　遺構と遺物の分布

遺構は、調査区北東端の斜面から検出された平安時代の竪穴住居跡１軒のみである。

遺物は、縄文時代の土器と石器、平安時代の土器、中世陶器が出土している。このうち、平安時代の土器は、竪穴住居跡埋土中からだけ出土し、縄文時代の大半の遺物は、第６図に示した遺物集中部（斜面及び小さな沢状部分）から出土した。

第２節　調査の方法

１　調査区の設定

発掘調査を円滑かつ正確に進めるために、対象区に一区画４×４ｍのグリッドを設定した。

遺跡内に打設されている道路計画用中心杭No400（第Ｘ系座標　Ｘ＝－17018.4966、Ｙ＝－64426.2513）を原点として、国家座標第Ｘ系座標北を求め、座標北のラインを南北基線Ｙ軸、これに直交するラインを東西基線Ｘ軸とした。原点をME50とし、Ｙ軸に２桁のアラビア数字、Ｘ軸に２文字のアルファベットを付し、各グリッドの南東隅の杭で両者を組み合わせて各々のグリッド名とした（第６図）。

２　発掘方法および記録作成

発掘調査は調査区の南側最高部から始め、順次北側へ進めて行った。途中２カ所に土層観察用のベルトを残し、土層図を作成した。土層図には、土色・土質・堅さ・締まり・混入物等について記録した。

遺構の確認は、地山が不明なため第３層上面及び中位で行った。遺構は、土層観察用ベルトを残して掘り下げ、平・断面図を適宜1/10、1/20の縮尺で作成した。

遺物は原則として遺物番号を付し、グリッド内における位置・レベルを記録して取り上げた。

以上のほかに、調査の内容を適宜35㎜判カメラで撮影した。フィルムは、モノクローム、リバーサルカラー、ネガカラーを用いた。

第３節　調査経過

平成元年10月４日　作業員に対する現場作業の説明の後、発掘機材の搬入を行い、調査区の木の枝等の除去をする。

10月９日　プレハブの設置、リース機材の搬入、ベルトコンベアーのセッティング。

10月11日　調査区南端部から調査を開始する。この部分は採油の際に掘平されており、泥溜のための大きなくぼみがある。

10月12日　表土が薄く、その下の地山に見える黄褐色土（第３層）から剝片が出土し始める。

10月17日　MG48グリッドを中心として、第３層中より土器片、剝片、チップがややまとまって出土している。この部分は、南側と北側に緩く傾斜しており、遺物は南側のごく緩い斜面下方に多い。

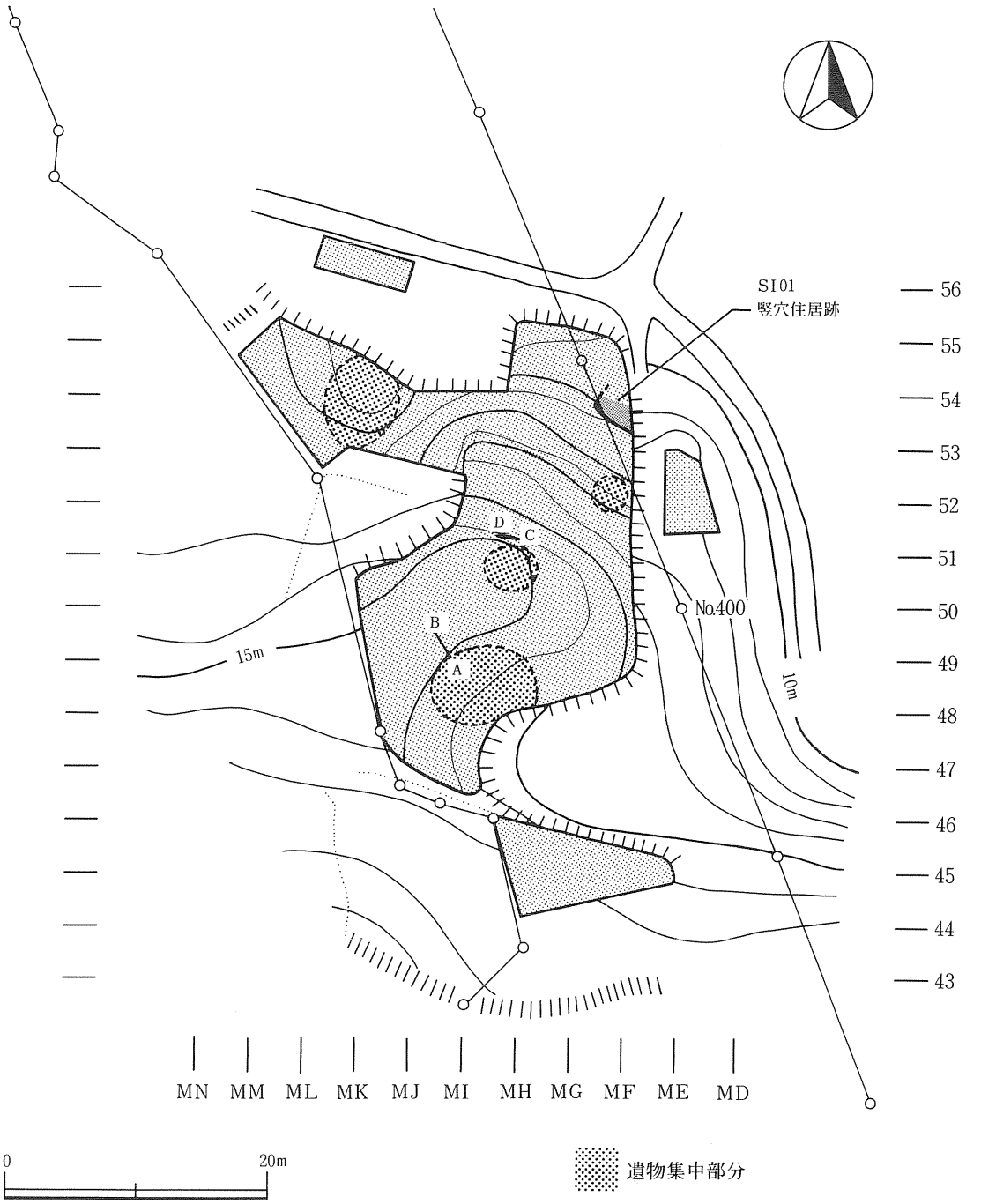
10月19日　MH51グリッドを中心に、第３層中よりチップやフレイクが出土している。土器が伴っていないので、旧石器時代のものである可能性も考えられたが、出土層位とレベルがMG48グリッド等と同様であること、フレイクが旧石器時代のものとは異なることから、結果的には縄文時代の遺物であることが分かった。

10月24日　先の２カ所の遺物集中部分の他に、やや急な斜面であるMF52グリッドからも少量の剝片や土器片が出土している。

10月27日　MF53グリッドから赤褐色の土師器小破片が出土し始め、この部分に古代の竪穴住居跡（SI01）が存在していることを知る。

10月30日　本遺跡の中では土器片が最も多く出土した調査区北西部の調査に入る。MJ～MK53グリッド部分が沢状になっており、ここに遺物が集中する。

ML53グリッドの第３層上面で藁灰状の炭化物が認められたが、耕作による攪乱が著しく、これを遺構としてそのプランなどを捉えることが出来なかった。11月６日



第６図　グリッド及び遺構配置図

にMH47グリッドでも同様の炭化物が存在したが、やはりプランや時代が不明である。

11月１日　　道路計画幅が一部変更され、調査区西側を若干拡張する。

11月10日　　機材の搬出、リース機材の運搬などを行って、大沢遺跡の発掘調査を終了した。

第２章　調査の記録

第１節　検出遺構と遺物

検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡１軒である。調査区全体を通してみると、縄文時代の遺物が最も多いにも拘わらず、該期の遺構は検出されていない。また、２カ所で時期不明の、藁灰状炭化物の分布する部分が認められたが、畑の耕作などによる攪乱が著しく、実測図などを作成しなかった。

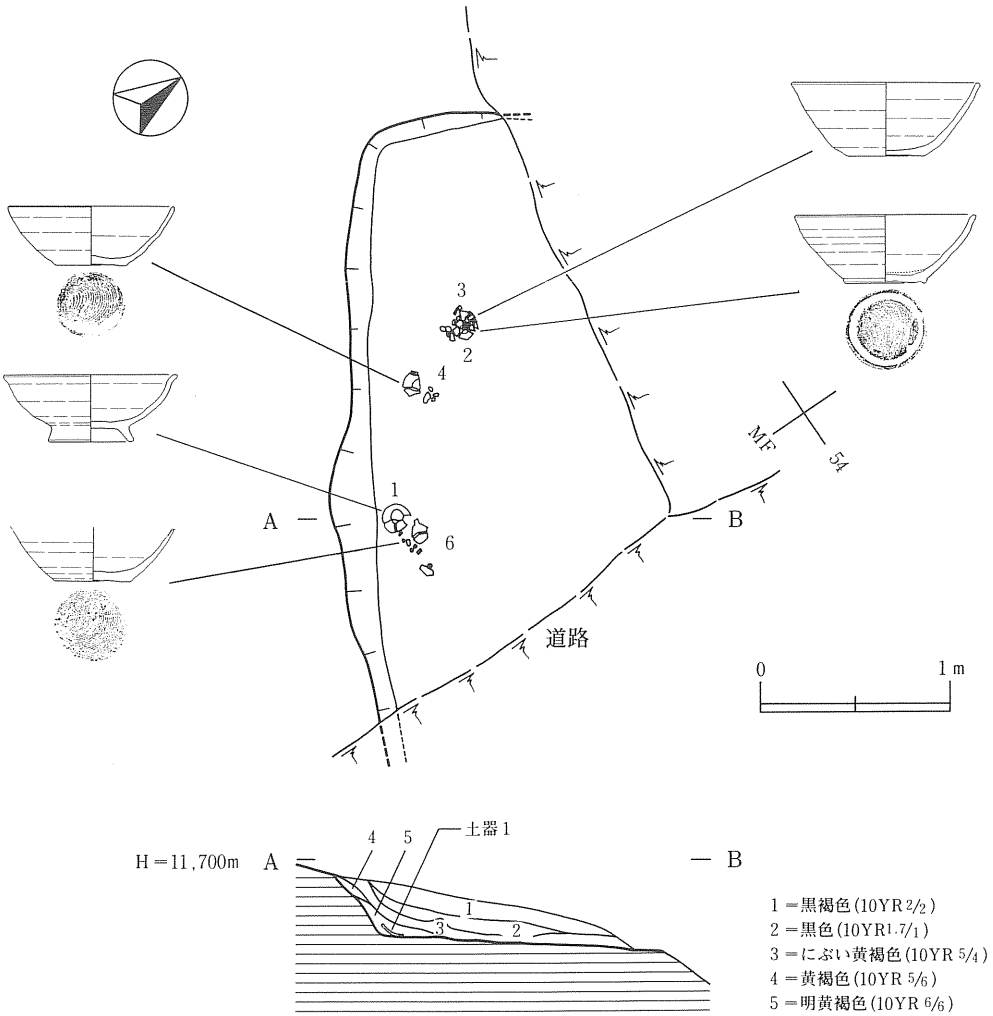
ＳＩ０１　竪穴住居跡（第７・８図、図版３・４）

調査区北東端部（MF53グリッド）の、北北東に面する斜面で検出された。この部分の耕作土を除去し、第３層上面調査中に土師器の小破片が出土し始めた。周囲を精査したところ、約３×1.5 mの範囲に黒褐色土が広がり、その中に土師器や木炭の小破片が散在することから、竪穴住居跡の存在を知ったものである。

竪穴住居跡は、北側が畑地造成、東側が丘陵上方に通ずる幅 1.5～２mの道路によって既に失われており、矩形を呈すると推定されるプランのうち、南辺と西辺の一部を残すのみである。南辺が 3.0m、西辺が 0.7m程残存しているところから、一辺が３m以上の規模を持つ竪穴住居跡と考えられるが、構築されている斜面の状況からこれを大きく上回る規模とは考えにくい。

埋土は５層に分けられ、断面の状況からいずれも自然堆積と思われるが、遺物が捨てられた状況で各層から出土しており、自然堆積であるか人為的に埋められたものか判然としない。１層は黒褐色土で、２層が僅かに混じっている。２層は黒色の腐植土層で、土師器坏の破片が含まれている。３層はにぶい黄褐色砂質土で、土師器坏の半完形品及び破片を比較的多く含む。壁際では本層の下に５層があって床面となるが、住居中央部では本層が直接床面を覆っている。４層は黄褐色砂質土で、壁の崩落土である。５層は明黄褐色砂質土で、南辺壁際にのみ存在する。他の層がそれほど締まりがないのに比べて、やや固く締まっている。土師器坏の完形品や大きな破片を含む。なお、４層を除く各層は木炭片を含み、木炭片は土器が存在する部分にやや集中する。

壁は、南西隅部でやや不明瞭であったものの、他では歴然としている。南辺中央部で少し崩れたか若干膨らんでいるが、他は急斜度で立ち上がる。床面は略平坦で、締まり、固さとも普通である。床面は、この部分の地山土と思われる灰白色の固結砂質粘土（径２～４cm程度の塊状となっている）上面を僅かに掘り込んでいるため、塊状の粘土が床面に露出している部分も

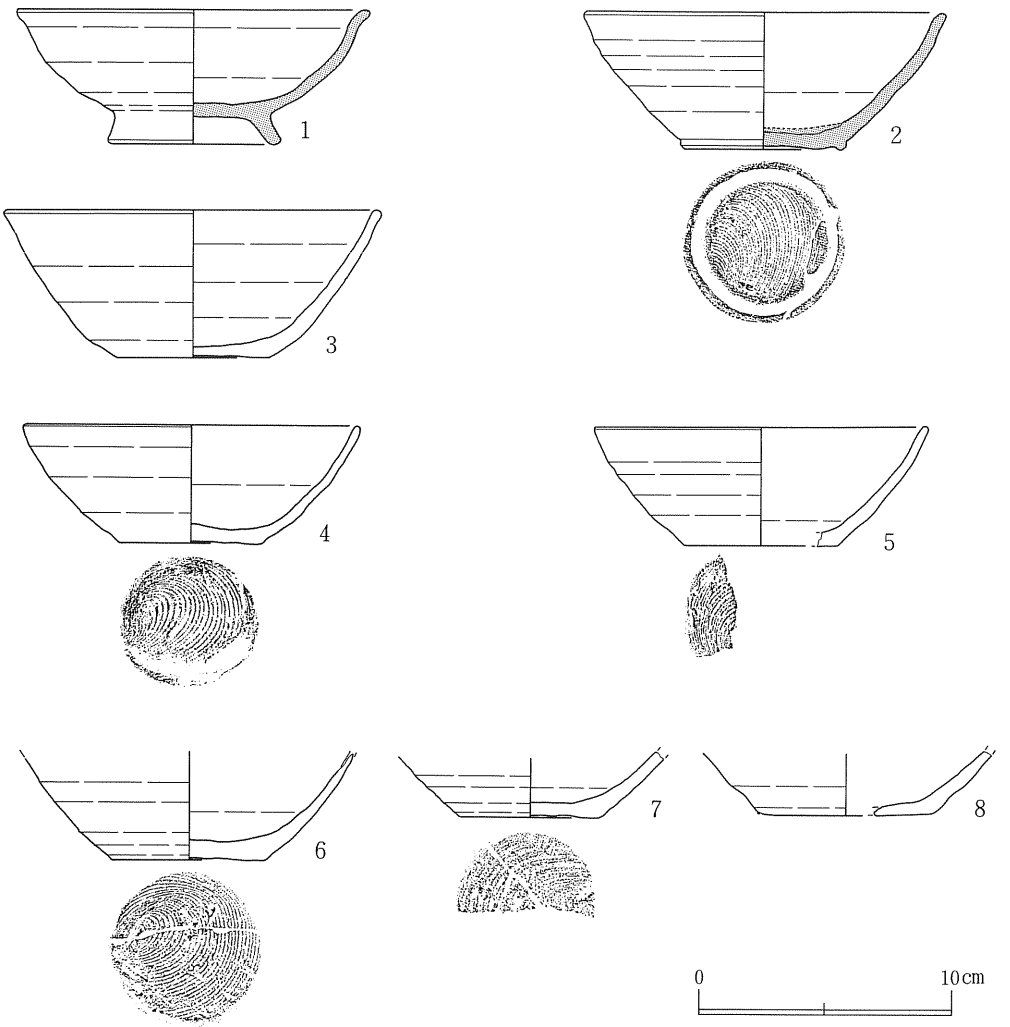


第７図　ＳＩ01　竪穴住居跡

ある。

この他に残存部分からは、カマド・柱穴・壁溝は検出されず、焼土も認められなかった。

遺物は、４層を除く全部の層から出土しているが、平面的には南辺の中央壁際とやや西辺寄りに集中しており、住居中央側からは殆ど出土していない。出土した土師器には、高台付坏、坏があり、いずれも整形にロクロを使用しており、図示した８点中５点と底部破片２点の底面には回転糸切り痕を持つ。底部切り離し不明のものも、器形や成形技法等からして回転糸切りであると考えられる。高台付坏と坏以外の器種は無く、須恵器も出土していない。図上復原を含めて８個体ほど図示出来たが、その他に底部が２個体分あり、全部で10個体強の坏類が存在するものと思われる。細片が多い。また、２次的な火熱を受けたと考えられる破片が殆どで、全体に脆くなっている。なお、第８図１～４（土器の番号と、第７図および図版４中の遺物番



第８図ＳＩ01竪穴住居跡出土土師器

号とが符合する）が、床面に接するか僅かに浮いた状態で、１と４が正立、２と３（２が下）が重なり倒立して出土した。５～８は埋土中から出土した。

第８図１は、内面に横位を主体とするミガキの後、黒色処理を施している高台付坏である。外面にもミガキの痕跡が残る。底部切り離しは、高台貼付に伴うナデ調整により不明である。胎土には細砂粒を多量に含んでいる。器使用に伴うのか、廃棄後の風化作用によるのか明らかでないが、外面の摩耗、内面のあばた状の剝落が著しい。口径14cm、底径6.2cm、器高5.3cmである。２も、内面に横位主体のミガキの後、黒色処理を施した高台付坏である。外面にもミガキが施されている。高台は低く、形ばかりのものである。底部切り離しは、回転糸切りである。内面は、弱い２次的火熱によるものか、黒色部分が一部とんでおり、剝落が著しい。胎土には

細砂粒を含むが、１よりは少なく、精選された粘土を用いている。法量は推定で、口径14.3㎝、底径6.5㎝、器高5.5㎝である。

３は、復原出来た土師器の中では、口径・器高共に最も大きい。器面は橙色を呈しているが、二次火熱のためアバタ状の剝落が外面ほど著しい。底部切り離し後の２次調整は認められない（以下、４～８も同様）。胎土には、砂粒を多く含んでいる。口径15㎝、底径６㎝、高さ 5.8㎝である。４は、底部に糸切り痕を留める坏である。器面は橙色を呈し、２次火熱のため剝落している。胎土には１～２㎜程の砂粒を比較的多く含んでいる。口径13.3㎝、底径5.6㎝、器高4.7㎝である。５は、1/4個体分から復原したものである。口縁部内外面が２次火熱によって赤変し、剝落している。いずれも推定で口径13.2㎝、底径6.1㎝、高さ4.7㎝である。６は、４とほぼ同程度の法量であると思われるが、２次火熱による剝落が著しく、器上半が不明である。７と８は、体部下半から底部の破片である。双方共に２次火熱による剝落が著しく、極めて脆くなっている。

第２節　その他の出土遺物

遺構外から出土した遺物には、土器と石器があり、１点の珠洲系陶器を除くと、全て縄文時代に属するものである。

１　土器（第９・10図、図版５）

（１）　縄文土器

縄文土器は、その大部分が細片となって出土しており、摩滅の著しいものも含まれている。範囲確認調査も含めて約180 点出土しており、そのうちの破片33点を拓影図で載せた（接合出来たものは、接合後を１点として扱った）。

破片から推定される器形や文様、施文の種類などによって大きく１・２群に分け、２群をさらに細分した。なお、この１・２群は、層位的に別々に出土したものではなく、同一層中に混在していた。

第１群土器

前期前葉に位置付けられるものを１群とした。

第９図１～３がこれで、同一個体である。拓影図の他に30点ほどの細片がある。器形は、底部から僅かに外傾して立ち上がり、口縁部が緩く外反する深鉢形土器と考えられる。口縁部には、草の茎もしくは縄文原体の端部の刺突列が数段施されている。頸部から胴部には、１段の縄の中心で自縛し、それをさらに撚った原体を横位回転した縄文が段状に施されている。自縛

によって出来た結節部が、施文原体の一方の端になって強く押されており、これがループ文風に見えている。胎土には繊維を含み、焼成良好で、比較的重い。

第２群土器

前期末葉に位置付けられる土器群を第２群とした。２類に分けられる。

１類（ 第９図４～12 ）

僅かに外傾して立ち上がった胴部が、直立するかやや外反する口縁部に至る深鉢形土器で、幅の狭い口縁部文様帯を持ち、その下端に隆帯を持つ類である。

４～６が口縁部、７・８が胴部、９～12が底部の破片である。４・５は口縁部がほぼ直立し、６はやや外反する。４～６の口縁部文様帯は、縄文原体の側面圧痕文が数条施され、口縁部下端に細い隆帯を有する。隆帯上には、４は竹管の横位刺突列、６は半截竹管の押引風の刺突列が施され、５は胴部の羽状縄文の上端がそのまま施されている。７～10（９と10は同一個体）の胴部には撚糸文、11が木目状撚糸文が施されている。12は器面が荒れて判然としないが、ＬＲ斜縄文かと思われる。５の胎土には繊維を多量に含むが、他には繊維痕が見えず砂粒を多く含んでいる。焼成は、４～12とも普通である。

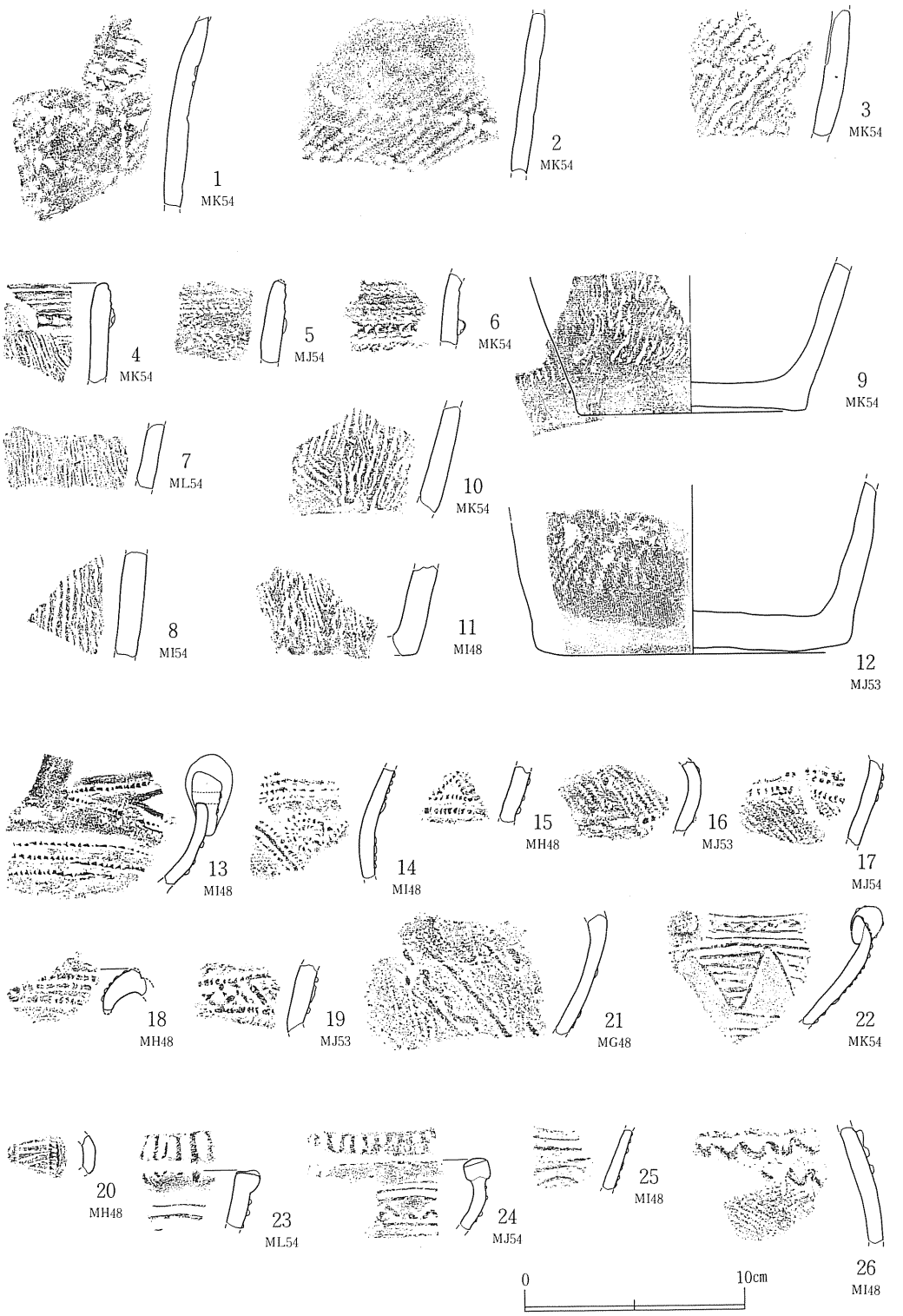
２類（ 第８図13～32 ）

全体の形状を知る資料が出土していないため詳細は不明であるが、胴部上半が膨らみ、頸部で強くくびれ、口縁部がキャリパー状に内弯すると思われる深鉢形土器を主体とする類である。施文の違いによって３つに細分される。

ａ：（ 第８図13～21 ）

細い粘土紐を貼付した後、その上に半截竹管の押し引きによる連続刺突を加えた文様を、口縁部から胴部上半に施した類である。胎土には繊維を殆ど含まず、径１～２㎜の砂粒が多く混入している。

13は、内弯する口縁部の破片である。口縁部上半と口唇部にかけては、内外面に分厚く粘土が付加され、複合口縁状を呈する。口唇部には、断面形が円形に近い楕円形を呈する飾突起が付されている。口縁端には窓状の小孔を有し、その周りを細い粘土紐で縁取りしている。口縁部には、粘土紐貼付後に半截竹管の押引による連続刺突を加えた隆線（以下便宜的に、単に粘土紐を貼付したものを隆線Ａ、さらにその上に半截竹管の押引きによって連続刺突を加えたものを隆線Ｂと呼ぶ）が、横位や斜位に施されている。外面に煤状炭化物が多く付着している。14は、屈曲する頸部から口縁部にかけての破片である。無文地の口縁部文様帯の上半には、平行する隆線Ｂ、下半には隆線Ｂによる渦文とその周りを区画する山形文が描かれ、両者の間はやや幅広の隆線によって区画されている。なお、下半の隆線Ｂは、幅８～10㎜の粘土紐の両端に半截竹管による連続刺突を加え、あたかも隆線Ａの両側に隆線Ｂを配したような効果を出し



第９図　遺構外出土土器（１）

ている。焼成はやや良好で、胎土には径３㎜前後の砂粒も含まれている。15も14とほぼ同様で、隆線Ｂによる三角形文が施されている。16と17は同一個体で、胴部上半の破片である。ＲＬ縄文の上に、隆線Ｂがゆるい弧状に施されている。18の口縁端部は器内側に折り曲げられた、いわゆる袋状口縁を呈すると考えられる。口縁に沿う形で、隆線Ｂが数条貼付されている。19は、口縁部下半の破片で、ＬＲ縄文の上に隆線Ｂを２条平行させ、その間に隆線Ａを斜格子状に配している。20は、筒状把手の破片と思われる。両端に隆線Ｂを縦位に配し、その間を沈線で連絡している。21は、口縁端の器内面側に粘土紐を貼付して肥厚させた口縁部破片である。波状口縁を呈する。ＲＬ縄文の上に、平行する隆線Ｂとその間に波状の隆線Ａを施した文様を１単位とし、これを斜位に２単位以上配している。焼成不良で、胎土に多量の砂粒を含む。

ｂ：（ 第９図22～26、第10図27～29 ）

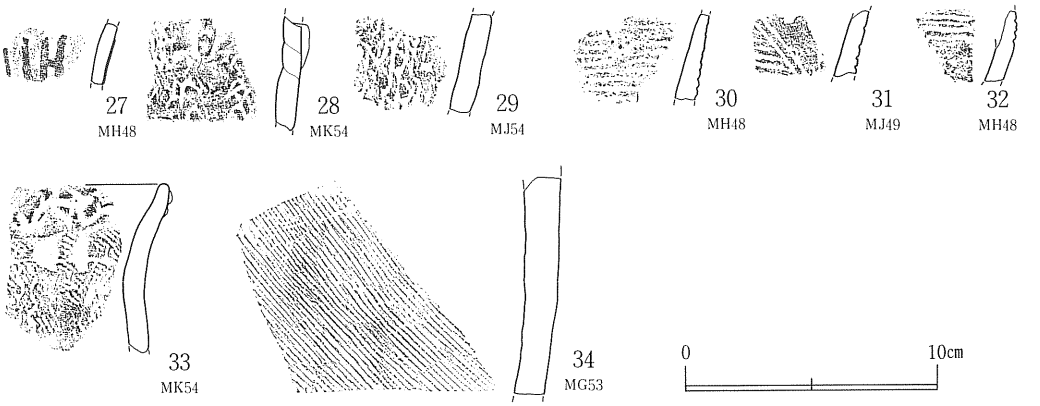
口縁部から胴部上半に粘土紐を貼り付け、種々の文様を描く類である。

22は、内弯する口縁部で、口縁端内側に粘土紐を貼り付け、内面側を折り返し口縁風にしたものである。口唇部には、隆線Ａが渦状に巻かれた半球状の突起が付されている。口縁部上端と下半には、平行する隆線Ａが施され、上端部ではその間に連続山形文（ 拓影図の右側では斜格子状になる ）が、中位では大きな連続山形文の間に平行する隆線Ａが充填されている。23・24は、口縁部から口唇部に太い粘土紐が付加され、複合口縁状を呈している。両者の口唇共に幅のやや広い面を有しており、縦断面形が鋸歯状を呈しているが、その施文法は異なっている。つまり、23は、平坦な口唇部に、口縁に直交する細いが高さのある粘土紐を貼付したもので、24は、やや丸みを持つ口唇上に、口縁に直交する刺突列を加えたものである。肥厚する口縁端部の下には、平行する隆線Ａが貼付され、24においては、その間に隆線Ａによる連続山形文が施されている。24の内外面、特に口唇部には煤状炭化物が多量に付着している。25の隆線Ａは、細く低い。26には、２本の隆線Ａが小波状に平行している。波の頂部を作出するに当たり、先端が爪形状の工具を用いている。27の隆線Ａは低く、部分的に粘土紐で連絡している。28・29は同一個体で、地文は不整の網目状撚糸文と思われるので、あるいは本類以外の土器である可能性もある。突起状の短い隆線Ａが縦位に施されているが、この隆線は、本土器の成形時に粘土紐を巻き上げて行く途中に付されたものであることが、割れ面の状況で分かる。

ｃ：（ 第10図30～32 ）

浅く細い平行沈線で文様の描かれるものである。小破片ばかりで、全体の器形等を推し測れるものはない。

30は、横位の平行沈線の中に、縦位の沈線も見える。31は、平行沈線で山形文もしくは三角形文を描いた後に、その中を横位の平行沈線で充填したものと思われる。



第10図　遺構外出土土器

３類（ 第10図33 ）

口縁部上端に粘土紐を波状に貼付し、その上に縄文原体を押圧した類である。

33の１点のみである。33は、わずかに外傾する胴部に、端部で若干内弯する口縁部の付く深鉢形土器である。隆線の下方には斜縄文（回転方向不明）が施され、その上に綾絡文が縦位に付されている。胎土には繊維を僅かに含み、外面に煤状炭化物が付着している。

（２）　中世陶器

珠洲系陶器・甕の胴部破片が１点出土している。34がそれで、外面には、間隔が狭くて浅い斜行するタタキ目、内面にはアテ具痕による凹凸が明瞭に残っている。色調は、内外面共灰色に近い灰白色で、細かい砂粒を含み、焼成は非常に良好である。

２　石器（第11・12図、図版６ ）

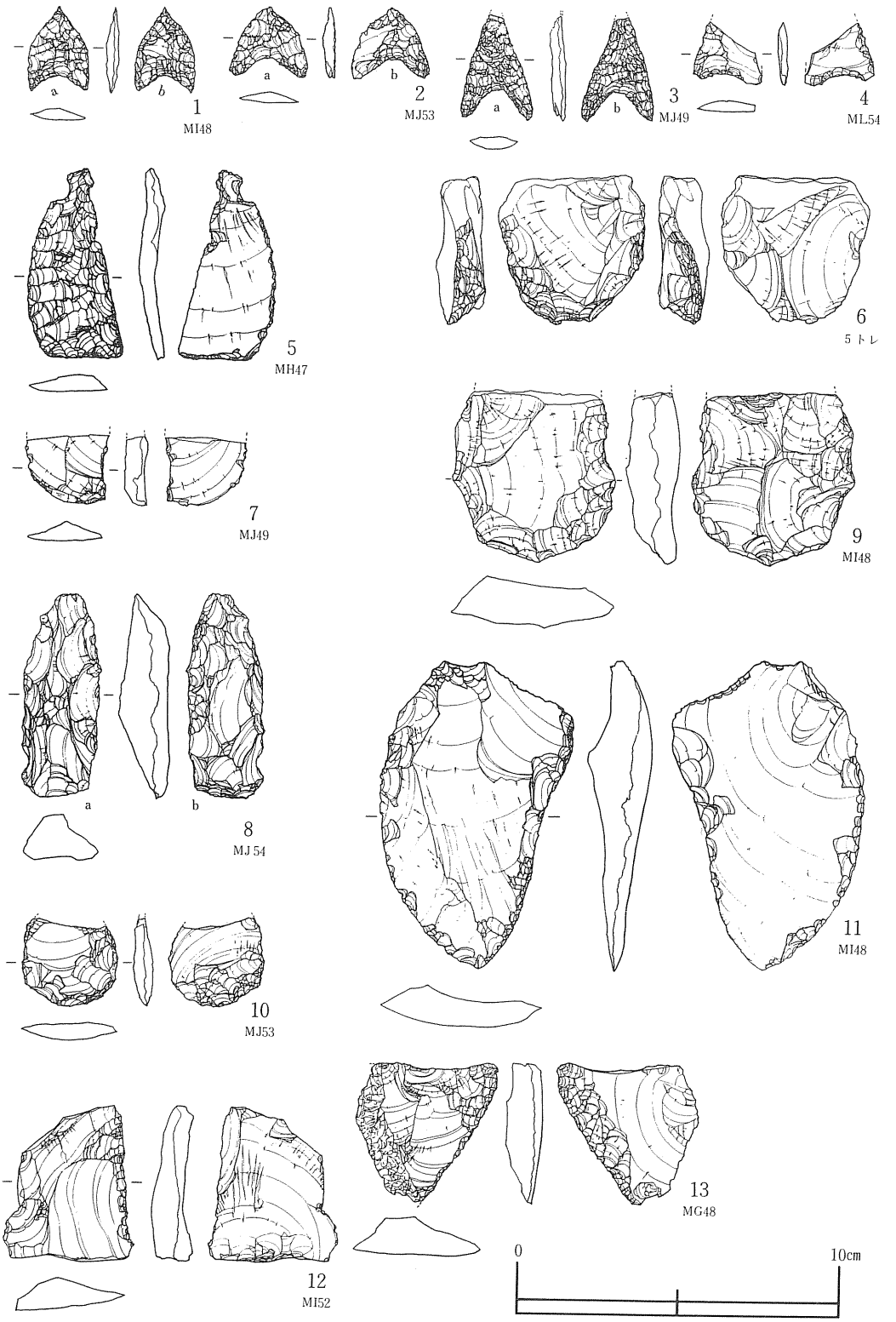
今回の発掘調査及び範囲確認調査で出土した石器には、剥片石器、磨製石器、礫石器があり、この他に400点以上のフレイクとチップがある。

（１）剥片石器

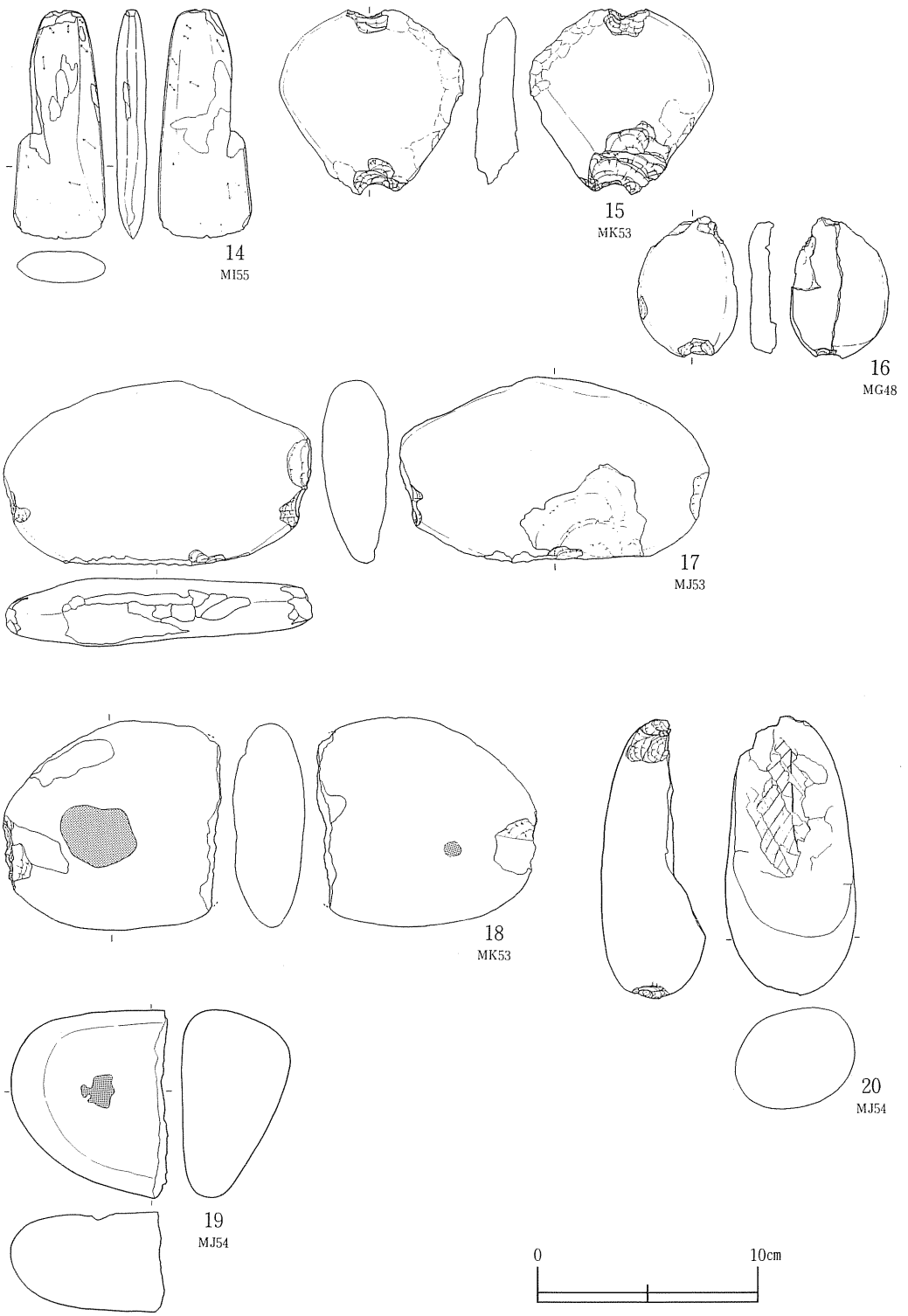
一部不明瞭なものもあるが、定形的な石器として石鏃４点、石匙１点、掻器２点、石箆２点、削器４点が出土している。

石鏃（第11図１～４）

石鏃が４点出土している。いずれも茎を持たず、基部がくぼむいわゆる凹基式である。１は、ｂ側に素材の腹面を僅かに残すものの、全体に丁寧な押圧剥離によって成形されたものである。器先端と両脚先端が鋭く尖っている。重さは、1.62ｇである。２も１とほぼ同様の形態を呈するが、脚部の大きさの割りには器先端側が短い。また、ｂ側に素材の平坦な腹面を残すなど、調整がそれほど丁寧でなく、全体の形も左右対称になっていない。完形品ではあるが、製作途



第11図　遺構外出土石器（1）



第12図　遺構外出土石器（２）

中か再調整途中で廃棄された可能性がある。重さは、1.54ｇである。３は、１と２が器幅と器長の比が接近しているのに対し、器長が大きい形のものである。ａ側とｂ側下半が丁寧な押圧剥離によって成形されているが、ｂ側中央やや上に、剥離によって除去しきれなかった高まりがある。先端部で折れているが、折れ面の厚さは0.8㎜ほどしかなく、この部分は使用によって折れたのではなく、製作時に折れてしまった可能性がある。重さは、2.33ｇである。４は、厚さ１～２㎜しかない剥片を素材にしており、成形のための剥離がまばらで折損している。火熱によって黒色化している。１～４とも頁岩製である。

石匙（第11図５）

縦型石匙１点である。製作に際しては、縦長剥片の打面側をつまみ部とし、腹面側の刃部を除く２辺に連続的な細かい剥離によって打面を作出し、ここから背面側に丁寧な押圧剥離を施している。背面側から見て右側辺が刃部で、その腹面側が微かに光沢を放っているが、光沢に関して言えば、刃部以外の２辺の稜が僅かに潰れ刃部よりも強い光沢を放っている。チャート製である。

掻器（第11図６・７）

６は、寸詰まりで厚みのある剥片の先端に急角度の刃部が作出されている。泥岩製と思われ、風化が著しく、一部ガジリもある。７は、縦長剥片の先端部にやはり急角度の刃部が作出されている。頁岩製で、折れている。

石箆（第11図８・９）

８は、小型の石箆である。ａ側の両側縁からは、器厚を減じないための配慮か、階段状剥離が施されている。刃部には、主にｂ側にやや急角度の短い剥離が施されている。頁岩製である。９は、分厚く比較的大きい剥片の縁辺に大まかな剥離が施されている。器中位で折損しており、泥岩の原材には珊瑚と思われる化石が２つ見えている。

削器（第11図10～13）

10～13は、剥片の１～２の縁辺に細かい剥離が施された削器である。12は、剥片の背面にのみ剥離が施されている。原材は、10がチャートで、他は頁岩である。13は弱い２次火熱を受けており、表面左側は割れ、その部分が火バネしている。

（２）　磨製石器

磨製石斧（第12図14）

磨製石器は、14の石斧が１点だけ出土している。刃縁は直刃に近い円刃で、その断面形は両凸刃である。基端と両側辺には狭いながらも面を持つ。刃部が若干荒れているため、使用痕は見えない。流紋岩製である。

（３）礫石器

原材である円礫の形状を、それほど大きく変えないで石器とした類である。石材は、たたき石が粗悪な頁岩である他は、安山岩である。

石錘（第12図15・16）

偏平な円礫の両端を打ち欠いた打欠石錘が、２点出土している。２点とも、礫皮面は擦られておらず、片面が部分的に剝落している。16は、２次火熱を受けている。重量は、15が172g、16が46ｇである。

半円状扁平打製石器（第12図17）

１点のみ出土した。17は、偏長な円礫の一方の長辺と２つの短辺の一部を敲打して、平坦に近い面を作出している。長辺の敲打後の面は擦られていない。

凹石（第12図18・19）

18は、欠損しているが、残った円礫の両面に浅いくぼみ部（図中のスクリーントーン部分）があり、一方の短辺には敲打痕がある。19は、半分に割れており、片面にのみくぼみがある。残存する部分のほぼ全面が擦られており、特にくぼみをもつ面はそのために偏平になっている。

たたき石（第12図20）

20は、楕円球状を呈する頁岩の円礫の両端に敲打痕を残すたたき石である。裏面の大部分が縦に割れているが、これは図の上端で敲いた時に生じたものと思われ、その面には、木の葉の化石が見えている。

第３章　まとめ

大沢遺跡の調査の結果、縄文時代の土器・石器などが出土し、平安時代の竪穴住居跡１軒と土師器坏・高台付坏、中世の珠洲系陶器（１点のみ）が出土し、検出された。

以下、大沢遺跡の縄文時代と平安時代についてまとめる。

１　縄文時代

調査区内からは、縄文時代の遺物は出土するものの、遺構が全く検出されなかった。これは遺跡の立地が、平坦面が少ない事にも起因しているものと思われる。しかし、調査区西部の遺物の在り方は、斜面上方から流れ込んだと考えられる状況を示していることから、調査区外に当る西側の斜面上方に何らかの遺構が存在している可能性がある。

出土した縄文土器は、大きく２群に分けられる。１群土器は、胎土に繊維を含み、口縁部文様帯には、草の茎もしくは縄文原体の端部による刺突列が数段施され、胴部には、ループ文のように見えるＬＲ縄文が段状に施文されている。前期前葉に属する土器であると考えられる。２群土器１類は、短い口縁部文様帯の下端に細く低い隆帯を持つことから、円筒土器下層ｄ式である。２群土器２類ａ・ｂ・ｃの文様は、ａが細い粘土紐貼付後の半截竹管の押引による連続刺突を加えたもの、ｂが単に細い粘土紐を貼付したもの、ｃが細く浅い平行沈線によるものである。これらの土器群は、前期末葉に位置付けられており、山形県吹浦遺跡出土の土器群に多くの類例を見ることが出来る。(註１)

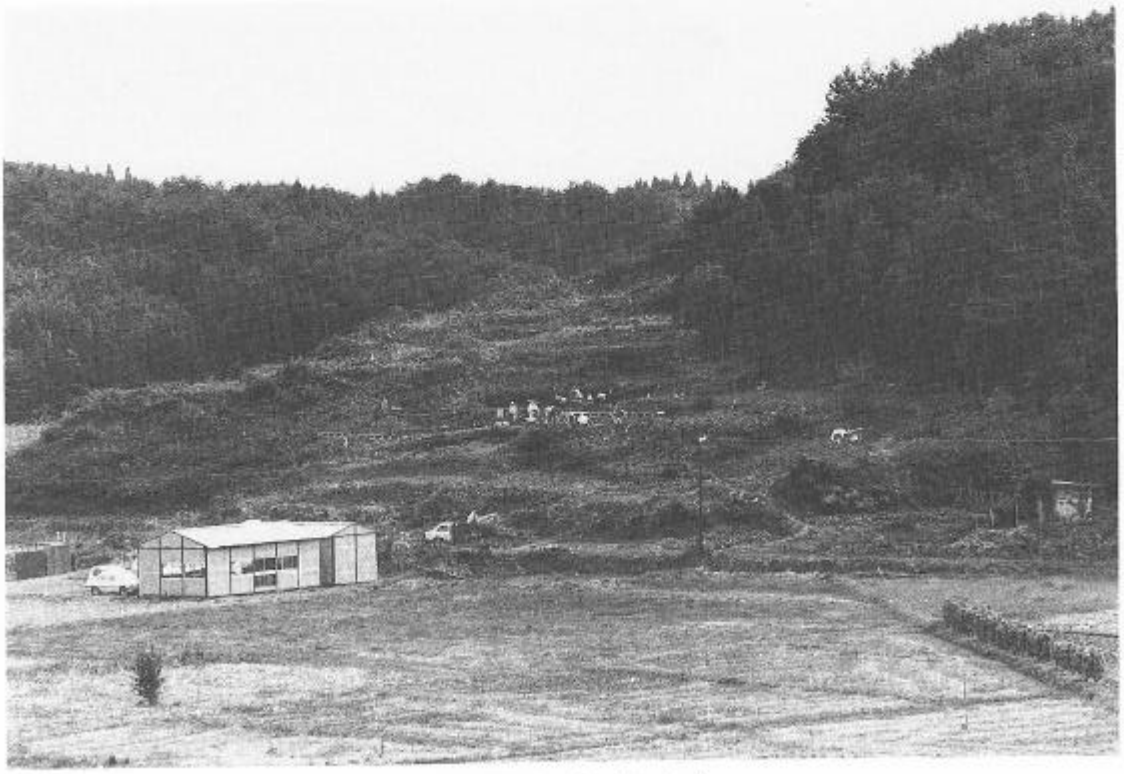
２　平安時代

平安時代の遺構は、SI01とした竪穴住居跡１軒で、遺物もその埋土中から出土したものに限られる。竪穴住居跡は、北向きの斜面中位に構築されており、プランの半分以上を失っているが、１辺の長さが３ｍ強の矩形をなすものと推定される。床面及び埋土中から出土した土師器には、高台付坏２点（内面黒色処理されている）、坏６点などがあり、これ以外の器種や須恵器は１点も出土していない。坏は、全てロクロ整形で、切り離しは回転糸切り、切り離し後の調整の無いものである。色調は内外面ともに橙色を呈し、秋田城跡発掘調査事務所で「赤褐色土器（Ａ）」と呼称されているものである。(註２)これらの土器は、器形及び、整形・切り離し・調整技法等から、10世紀前葉頃のものと考えられる。今回の調査区内には、SI01竪穴住居跡以外に該期の遺構は無く、遺物も出土していない。従って、調査区外である斜面下方に竪穴住居跡等の遺構が存在した可能性はあるものの、竪穴住居跡が数軒以上からなる集落は想定しにくい。

註１　山形県教育委員会『吹浦遺跡第三・四次緊急発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第120集 1988（昭和63年）

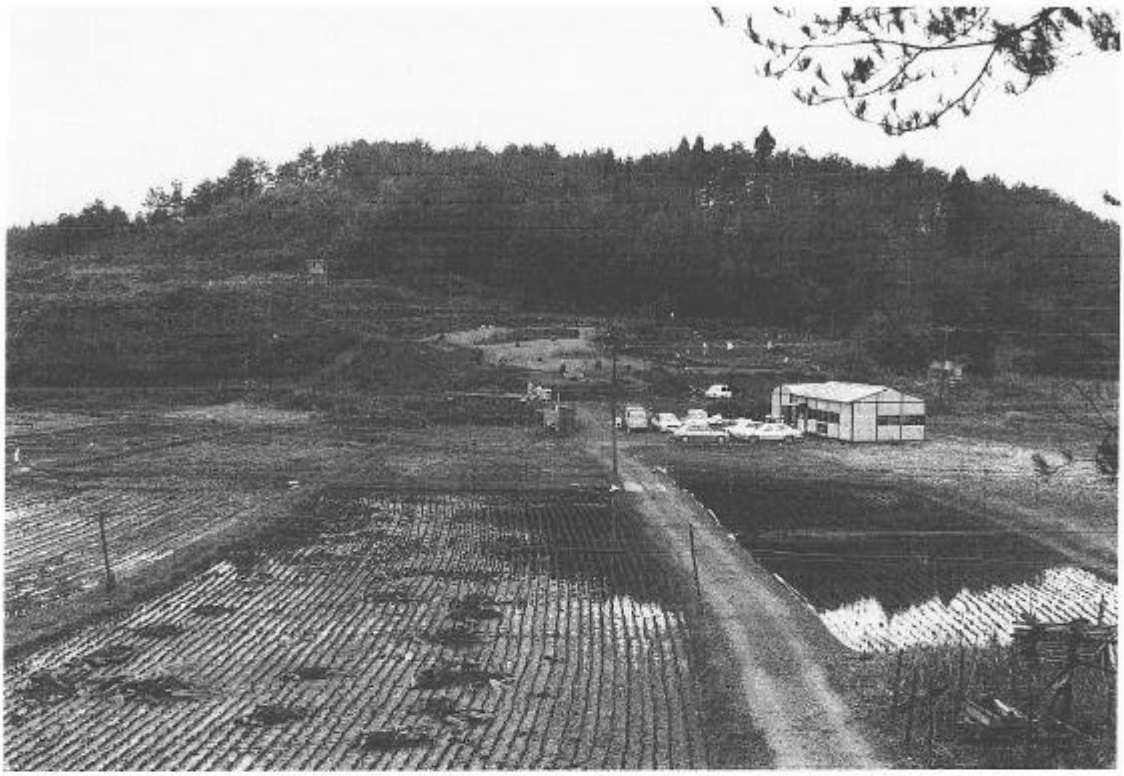
註２　秋田市教育委員会『秋田城跡』昭和50年度秋田城跡発掘調査概報 1976（昭和51年）

1　遺跡遠景（北西▶）

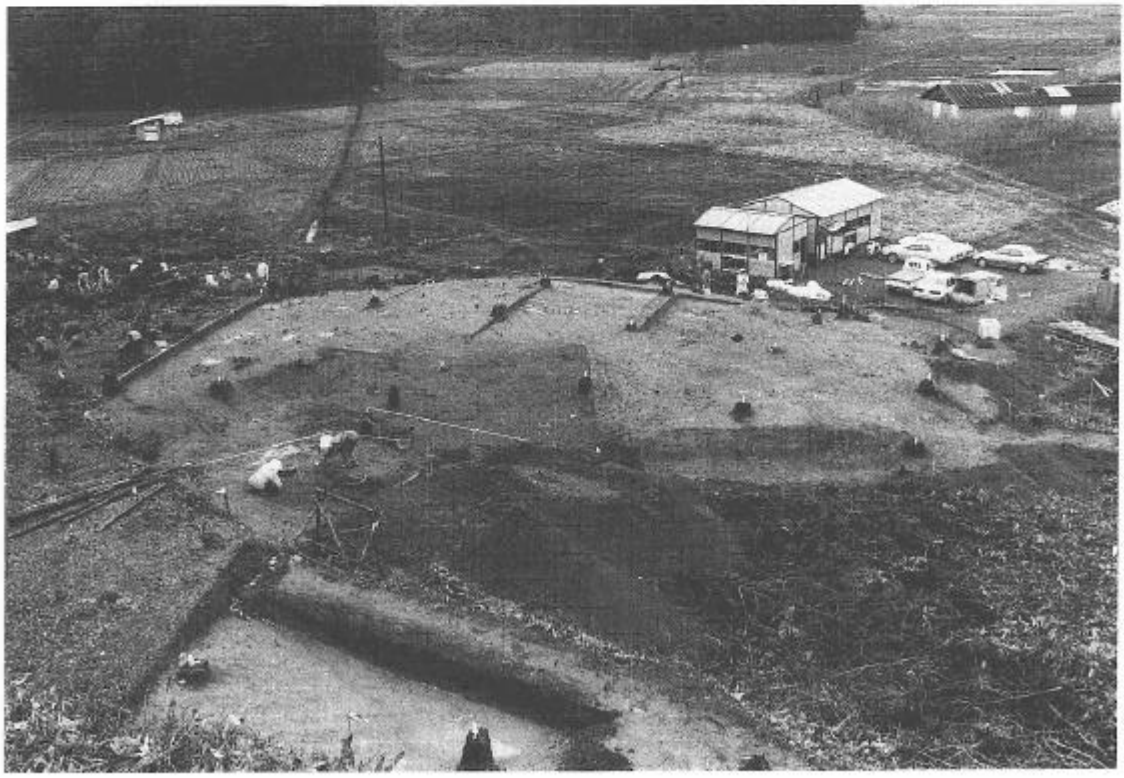


2　遺跡全景（北西▶）

図版2

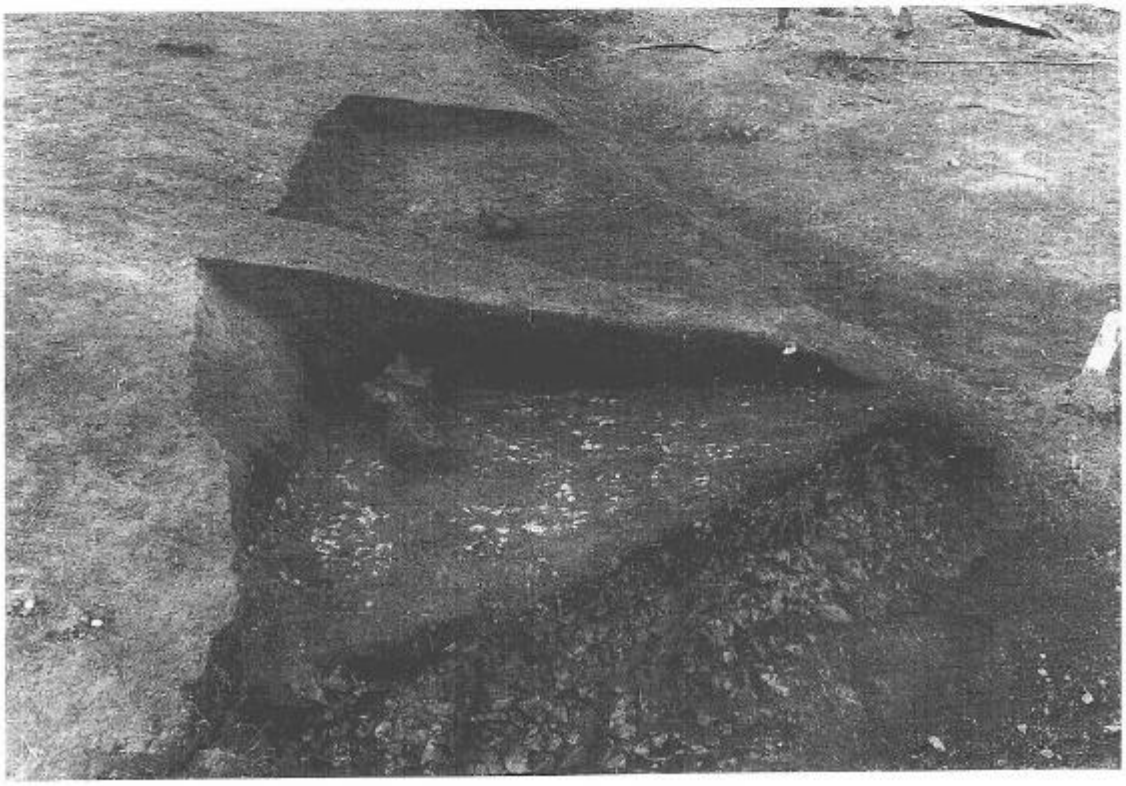


1　遺跡全景（北東▶）



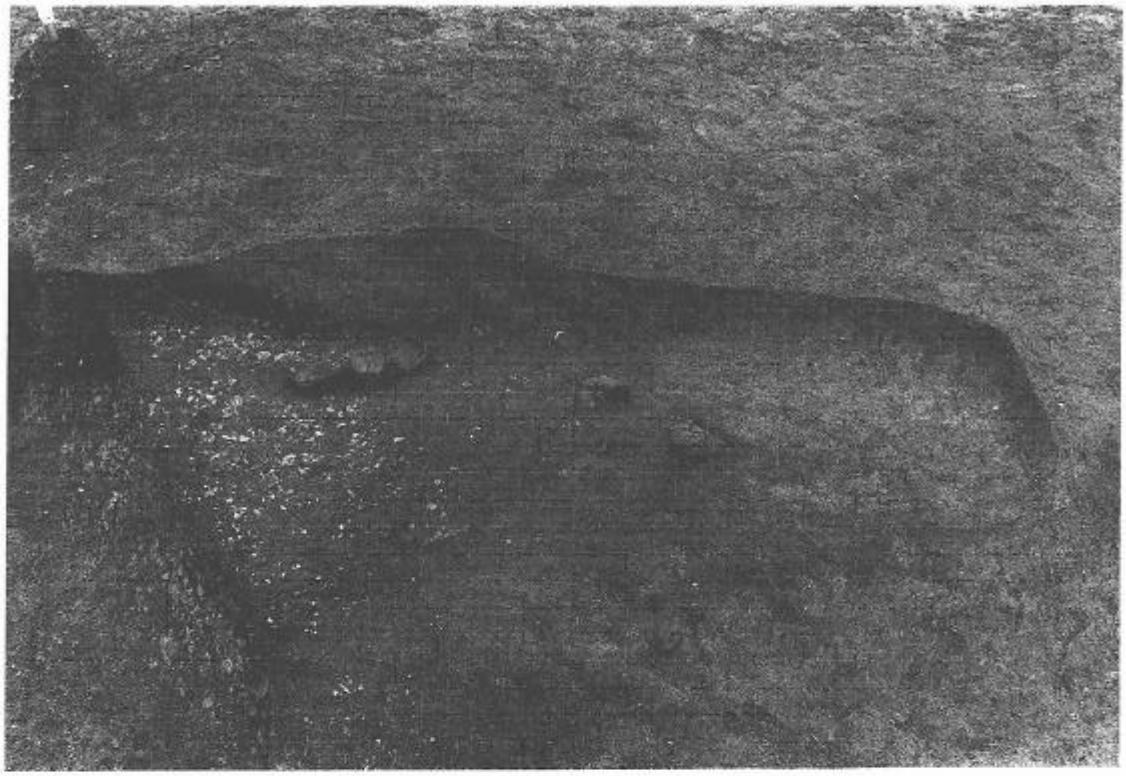
2　調査区全景（南▶）

1　MH48グリッド周辺の縄文時代遺物出土状況（南東▶）

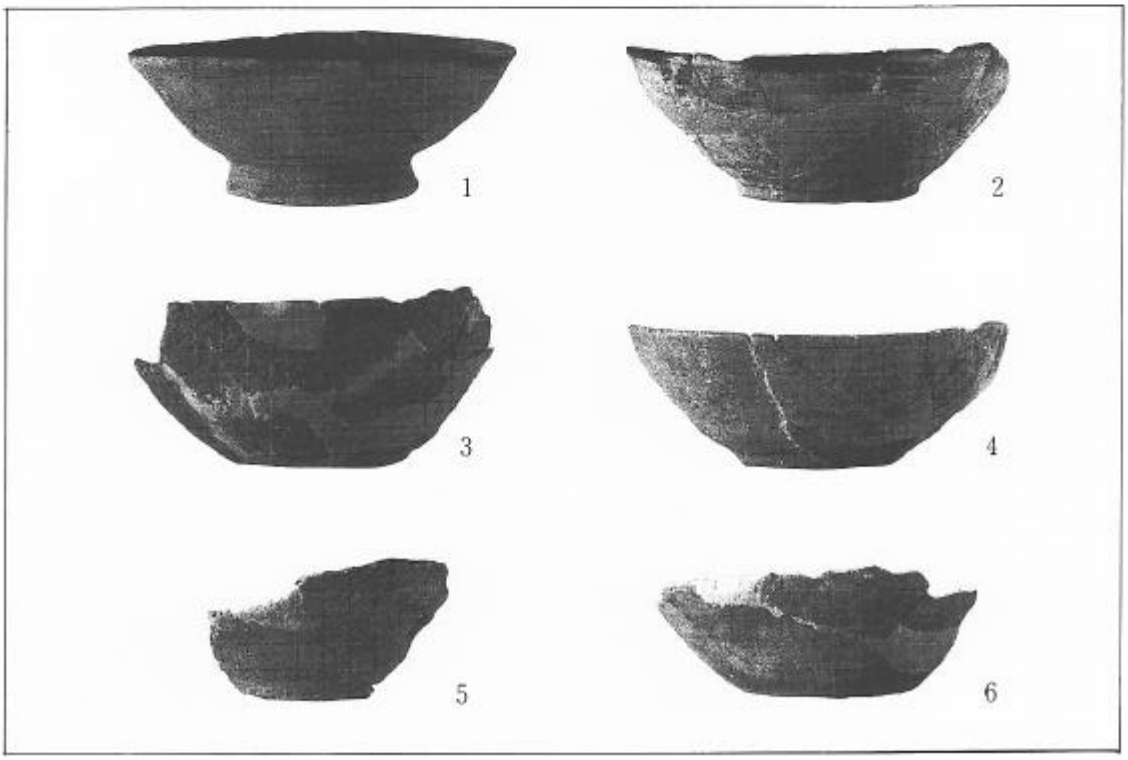


2　ＳＩ01　竪穴住居跡（東▶）

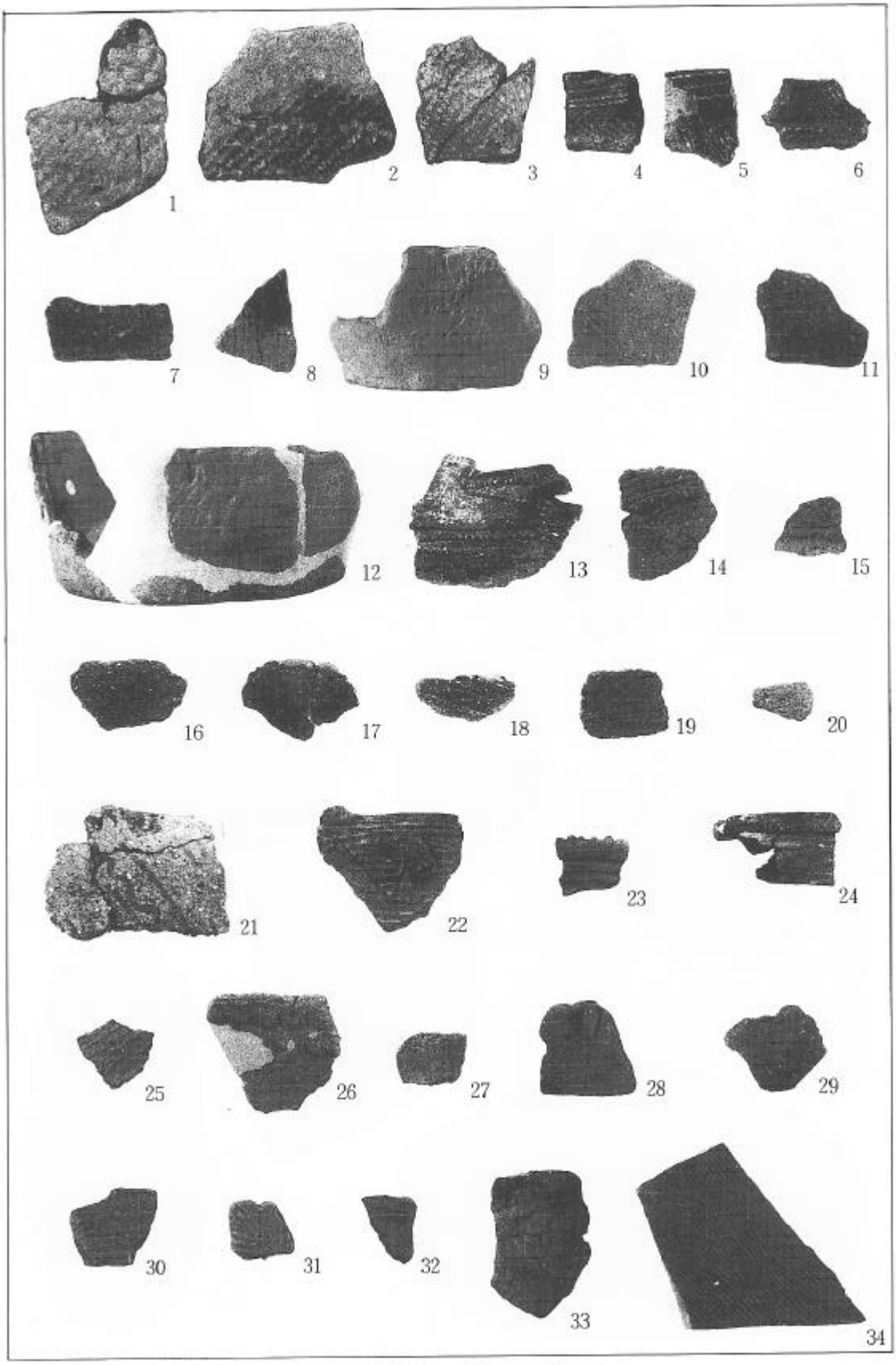
図版4



1　ＳＩ01　竪穴住居跡遺物出土状況（北▶）

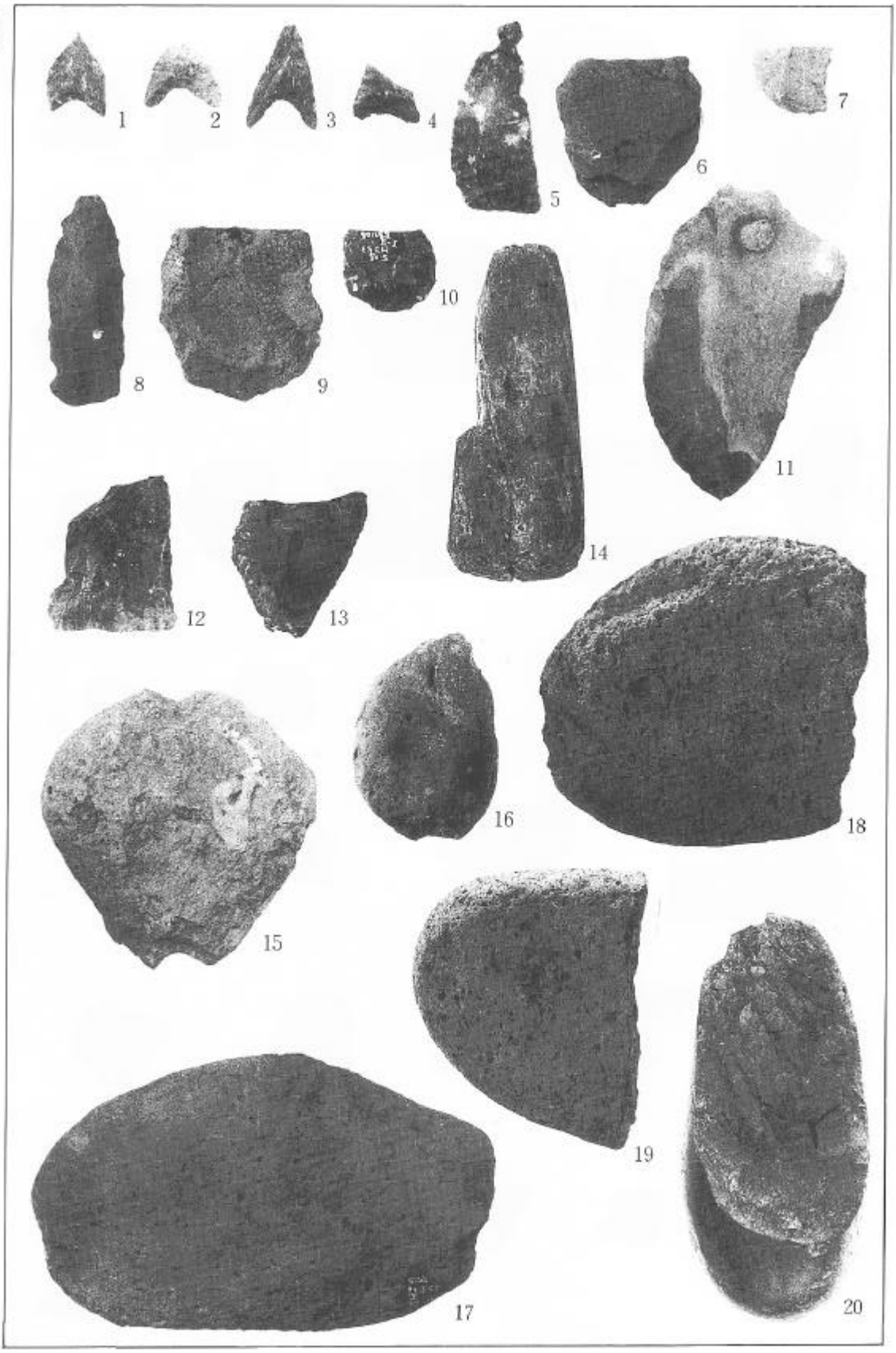


2　ＳＩ01　竪穴住居跡出土土師器　　（約1/3）



遺構外出土遺物　土器　　（約1／3）

図版6



遺構外出土遺物　石器　　（約1/2）

MATU DATE

松館遺跡

第１章　調査の概要

第１節　遺跡の概観

松館遺跡は、秋田市金足岩瀬字松館29に所在する遺跡である。秋田市の北端に位置し、200ｍ程で南秋田郡昭和町との境界がある。50ｍ西側を一般国道７号昭和バイパスが走っている。

遺跡は、八郎潟に向けて張り出した丘陵地の先端にあり、南に向って小さく突出した舌状部分である。遺跡頂部の標高は22ｍ、周囲水田面との比高は10ｍを測る。

調査前の状況は、上面平場および東側緩斜面では畑地が残り、他は雑木におおわれていた。

遺跡を西方からのぞむと独立した丘陵のようにみえ、以下の地形的特徴からいわゆる館跡としての可能性が考えられた遺跡である。〈突出した舌状部を区切るかのように、堀切状の大きな切り通しがみられる。〉〈北側上面に東西15ｍ・南北50ｍの広い平場がある。〉〈東側斜面に３～４段、北西側斜面に１～２段の幅５～８ｍの細長い平場をもつ。〉しかし、発掘調査によってこうした地形的特徴は、戦中あるいは戦後に掘削された結果であると判断された。

第２節　調査の方法

１.調査区の設定

調査を計画的に進めるために調査対象区に一区画４×４ｍのグリッドを設定した。

遺跡内に所在する道路計画センター杭ＮＯ.35を原点として国家座標第Ｘ系座標北を求め、この座標北のラインを南北基線Ｙ軸とし、これに直行するラインを東西基線Ｘ軸とした。基準交点ＮＯ.35をＭＡ50とし、Ｙ軸に２桁の算用数字、Ｘ軸に２文字のアルファベットを付し、各グリッドの南東隅の杭で両者を組み合わせてグリッド名とした。

２.発掘方法および記録作成

南側山頂部からはじめて北側へ調査を進めていった。地山の褐色土層、明黄褐色土層で、遺構確認を行った。遺物は表土から地山まで掘り下げる間に出たものをとりあげた。

＜遺物の記録＞　そこで遺物の記録作成・取り上げは次の方法で行った。南東隅の杭を基準としてグリッド内における位置を記録し、遺跡内における遺物番号を付して取り上げた。

＜実測図の作成＞　精査した遺構は、調査区内に打設した方眼杭を基準として簡易な遣り方測量によって図面を記録した。遺構の平面図・断面図は、1／10・1／20の縮尺で作成した。

遺跡全体の土層図は、南北ＭＡライン、東西50・55ラインを延長して作成した。土層図は1／20の縮尺で作成し、色調・かたさ等の特徴を記載した。

＜写　真＞　現場の写真は６×4.5判と35㎜判のカメラを用い、広角・標準レンズを適宜使用した。現場撮影用のフィルムはモノクロ、およびカラーリバーサルの２種類を使用した。撮影コマ数は666である。遺物の写真撮影は35㎜判のカメラを使用し、モノクロで行った。

３.遺物整理の方法

＜遺物の整理＞　出土した遺物は少なく、55×34×15㎝のコンテナが３箱である。遺物は素材の種類から大きく土製品と石製品に分かれ、土製品は素焼きの焼き物である縄文土器と陶磁器があり、石製品である剝片石器・礫石器の石器類と石器素材が大部分をしめている。

これらの遺物を洗浄し、接合作業を行った。なお石器と土器には、グリッド名・層位・出土年月日を注記した。なお火葬墓の覆土をもち帰り、２㎜目網のふるいを通し水洗した。

＜土器・石器の実測図作成＞　主な土器破片の拓影をとる。石器はすべて1／1で図化した。

第３節　調 査 日 誌

５月14日　遺跡上面は雑草、斜面は雑木におおわれていたため、刈払い作業を行う。

５月21日　刈払いがほぼ終了し、調査前の遺跡遠景を撮影する。

５月22日　遺跡を南北に縦断するＭＡラインにそってトレンチを掘る。つづいて横断する50・55ラインのトレンチを掘る。現況の地形を測量する。

５月25日　南側斜面下を排土置場として、ベルコンのそなえつけを行う。南端最高位からグリッド毎に表土除去を開始した。ＬＪ46グリッドで炭が充填する土坑プランを確認した。

５月30日　南端部分の表土除去が終了し、鉄塔東側の表土除去を進める。

６月１日　範囲確認調査を行っていた大平遺跡の作業員が合流した。

６月５日　鉄塔周辺の表土除去が終了し、北側へ進む。

６月13日　ＬＪ52・53グリッドで30点以上の石器と剝片が出土する。調査区南側のＳＫ01～06とした黒褐色土の落ち込みを精査し、写真撮影を行う。

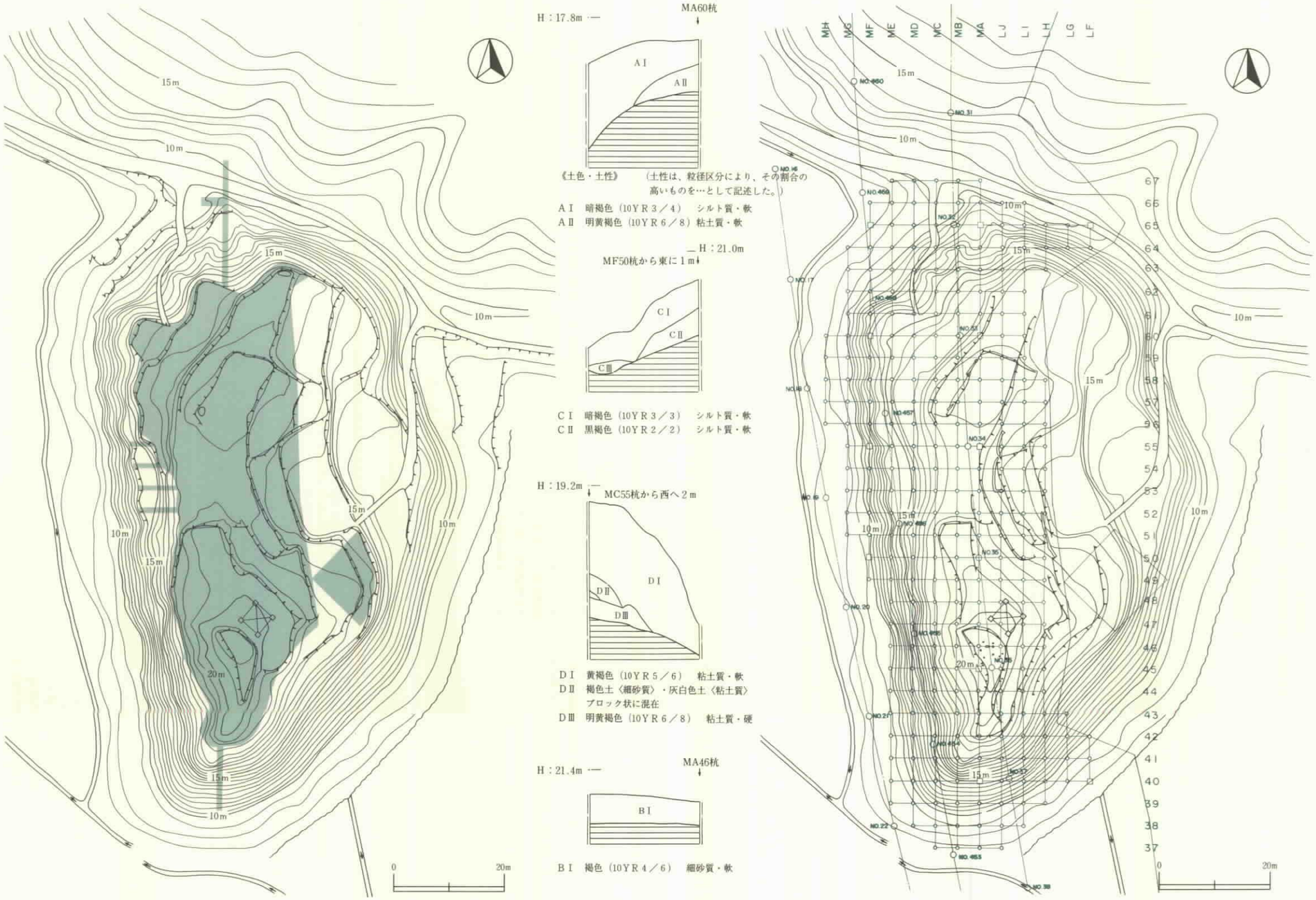
６月19日　ＳＫ02～09とした黒褐色土の落ち込みを半切し、写真撮影後に土層断面図を作成する。また55ラインに残した土層観察用ベルトの土層図を作成する。

６月20日　段差がある北西側をのぞいて、表土除去がほぼ終了する。これまで調査した平場の削平状況および斜面に入れたトレンチの状況から、遺跡は館跡ではないと判断した。したがって、斜面も含めていた調査区を台地上面にせばめ、調査期間を短縮することにする。

６月22日　北西側の作業にそなえて、ベルトコンベア８台を移動。午後に表土除去を開始した。

７月２日　土層観察用ベルトを除去し、全面を精査して行く。５日　全景写真撮影。

７月９日　遺構図面及び調査後の地形図作成終了。10日　器材搬出、プレハブ解体、調査終了。



第13図　調査区域（左:調査前の地形、右:調査後の地形）およびグリッド配置図

第２章　調査の記録

第１節　調査区の地形と層位

調査区の地形の概略は以下のとおりである。上面南端は小山状の盛り上がりがあるが、北側は細長い平坦面がつづく。東側は段々に下る畑地であるが、西側は急斜面となっている。ただし北西側中腹に帯状の平場が入っている。北側の切り通し下場は３ｍの幅で平坦面がつづく。

調査区域は、地形に手が加えられているため、プライマリーな状況での層位を把握できなかった。ここでは、南・北・東・西各地点での層状を述べたい。とくに火葬墓が検出された南側は、笹竹の根をよせると細砂質の褐色土層があらわれ、下は砂利層となる。北側は、暗褐色の表土が20cm程堆積しており、その下は灰白色ないし明黄褐色粘土層であった。東側ＭＣ55杭付近の表土は黒褐色土で30～50cmの厚さがあり、地山は明黄褐色土層であった。西側の、ＭＦ55杭付近では、上面を平坦にした際動かされた明黄褐色土が縁辺によせられ、２ｍ以上の堆積をしていた。北西側中腹の帯状の平場は10cm前後で灰白色粘土層に達した。

第２節　検出遺構と出土遺物

調査区内で検出した遺構は、土坑と炭をともなう火葬墓である。土坑は東側斜面で１基、火葬墓は、南端の小山状に残っていた場所から４基検出された。

縄文時代の石器および石器素材は、大部分が東側斜面からみつかっている。

以下土坑、火葬墓、出土遺物の順にその詳細を記述した。

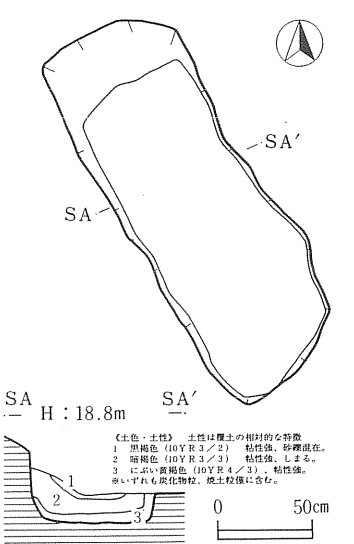
第１号土坑（ＳＫ04）

＜位置・確認状況＞　ＬＨ46グリッド北西隅に位置し、地山明黄褐色土層面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞　長方形を呈しており、長さ105cm、幅37cm。確認面からの深さは西側で36cm、東側で14cm。

＜堆積土の状況＞　上位にうすく黒褐色土が覆い、中位に暗褐色土が、底面には黄褐色土が４cmの厚さでうすくＵ字状に堆積している。

＜壁・底面の状況＞　北側をのぞき、ほぼ垂直に掘り込まれている。底面は平坦である。



第14図　第１号土坑

＜遺物・その他＞　堆積土の上位で石器素材がみつかっているが、その他はない。

第１号火葬墓（ＳＫ01）

＜位置・確認状況＞　ＬＪ46グリッドの南側、第２号火葬墓のすぐ東にあたる。表土をとり除き、地山の褐色土層面で炭のまとまりとして確認した。

＜平面形・規模＞　直径60cm程の円形を呈している。確認面から底面までの深さは12cmである。

＜堆積土の状況＞　上位に炭のまとまりがあり、底面との間に地山ブロックを含む暗褐色土が入り込んでいる。

＜壁・底面の状況＞　丸い鍋底状を呈している。

＜遺物・その他＞　炭に混じって、こまかい骨片がみつかった。

第２号火葬墓（ＳＫ24）

＜位置・確認状況＞　ＬＪ46グリッドの南側、第１号火葬墓のすぐ西にあたる。地山の褐色土層面を精査して、長円形の掘り込みとして確認した。

＜平面形・規模＞　平面形は西側がよりふくらんだなすび形を呈している。上部で長さ96cm、最大幅44cmを測る。確認面から底面までの深さは36cmである。

＜堆積土の状況＞　上位を褐色土が覆い、下位にはまばらに炭を含む黒褐色土が堆積している。

＜断面の形状＞　幅のせまい東西ラインで切ると、Ｕ字状を呈している。

＜壁・底面の状況＞　ほぼ垂直に掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。

＜遺物・その他＞　下位の黒褐色土内から炭とともに、比較的大きな骨片がみつかっている。

第３号火葬墓（ＳＫ23）

＜位置・確認状況＞　ＭＡ46グリッド杭直下にあり、表土をとり除き、地山の褐色土層面で炭のまとまりとして確認した。

＜平面形・規模＞　直径40cmの円形を呈している。確認面から底面までの深さは22cmである。

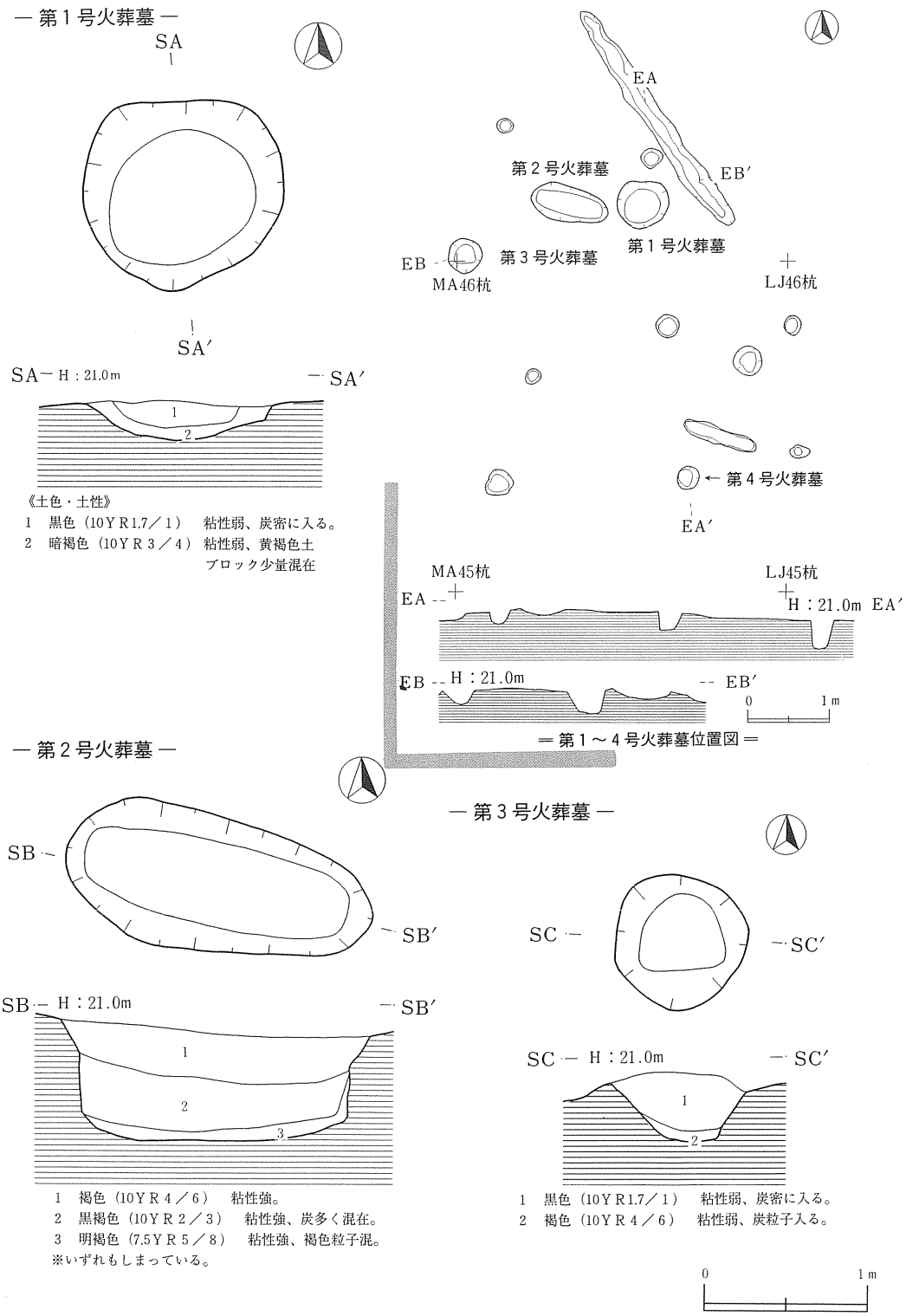
＜堆積土の状況＞　炭のまとまりがもりあがり、底面との間に薄く褐色土が入り込んでいる。

＜壁・底面の状況＞　丸い鍋底状を呈している。

＜遺物・その他＞　炭に混じって、こまかい骨片および貝殻片がみつかっている。

第４号火葬墓（ＳＫ18）

＜位置・確認状況＞　ＬＪ45グリッドの地山の褐色土層面で、黒褐色土が充填した小穴として確認した。



第15図　第１～第４号火葬墓

＜平面形・規模＞　確認面で直径26cmの円形を呈しており、深さは35cmを測る。

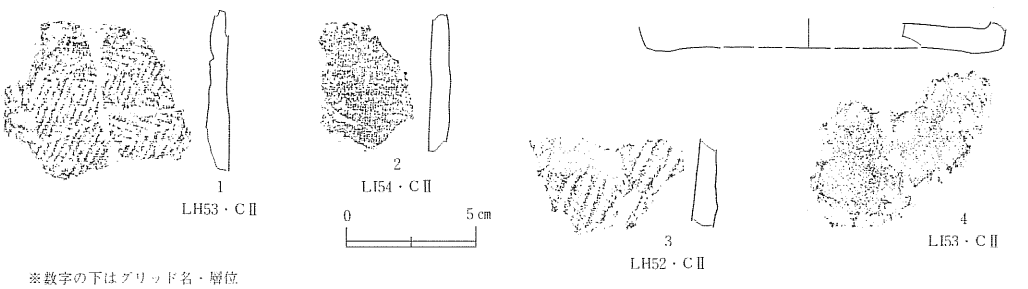
＜堆積土の状況＞　上位に黒褐色土が覆い、下位には暗褐色土が堆積していた。

＜壁・底面の状況＞　掘り込みがほぼ垂直であるが下にいってややすぼまる。

＜遺物・その他＞　暗褐色土内からこまかい骨片がみつかっている。

出土遺物

―土器―　ＬＨ53グリッド中央、ＬＩ53グリッド北側で破片３、４点まとまっていただけである。第16図１～３は胴部、４は底部破片である。１は羽状縄文、２は縦位回転の縄文、３は横位回転の縄文が施文されている。



第16図　出土遺物 ― 土器 ―

―石器―　第21図は東斜面の９グリッド（ＬＨ52～54、ＬＩ52～54、ＬＪ52～54）の遺物出土状況を点で示したものであるが、石器素材に混じって、実測図にした半数以上の石器類がこの区域内で出土している。ここでは種類別に説明を加えた。

石　　鏃（第17図１～５）

５点出土している。１～３はいずれも無茎であるが、１・２は２等辺三角形、３は柳葉形を呈している。１・２の素材の一部に剥離面を残すほかは、両面とも側縁からの調整加工によって仕上げている。

４・５は有茎で、ほぼ柳葉形を呈している。基部のつくりにちがいがみられ、４は凸基、５は尖基である。両面ともに側縁からの調整加工によって仕上げている。５は中軸に明瞭な稜をもっている。

石　　匙（第17図６～９）

つまみ部のつくり、刃部のかたちにちがいがあるが、つまみ部の中心線をとおる長さに対して幅がせまい。いわゆる縦型の石匙である。

６・８は縦長の剥片を素材としており、片面は平坦な主剥離面を残し、もりあがって凸を呈する片面に調整加工を施している。調整加工はつまみ部から、側縁先端までめぐっている。

７・９は両方に剥離面を残す、扁平な素材の縁辺に調整加工を施したものである。

７は剝片先端の一部に両面から調整を加え、つまみ部をつくり出している。両側縁は片面から連続する調整を加えてる。

８は、つまみ部から肩のつくり出しは、両面から粗く調整加工しているが、左側縁は片面から連続的に調整を加えている。つまみ部にアスファルトが付着している。

石　　箆（第18図10・11）

10は短冊形を呈し、11は撥形を呈するものの基部と思われる。いずれも肉厚の剝片の両面を調整加工して、形をつくり出している。

10は両面の側縁から調整加工をしており、中位での断面は凸レンズ状を呈している。基部および刃部は相対する面からの剝離を加えており、刃部の角度は45度を測る。

打製石斧（第18図12・13）

12は箆形、13は短冊形を呈しているおり、中間よりやや上がくびれている。

12は、板状の原石の周辺を調整加工して、形をつくり出している。刃部は両面から平坦に調整しているが、えぐり部は片面から大きく剝離している。

13は、肉厚の原石の周辺に調整を加え、形をつくり出している。いずれの部位も両面から調整加工しており、側縁は剝離した後に擦りも加えて、にぎりやすくなっている。刃部は敲打したのか、かなり磨滅している。

石　　核（第19図16）

16は、転石をそのまま利用したもので、片面に礫皮面が残っているが、別の片面に剝離痕がみえる。

剝片石器（第19図14･15･17･18）

14は、縦長剝片の側縁を調整加工したものである。裏面は主剝離面をそのまま残しており、表面の側縁に階段状の調整を加えている。

15は、一辺に連続する調整を加えている。

17は、台形の上部に打撃面をのこして、その対する辺、左右の側縁に調整を加えている。

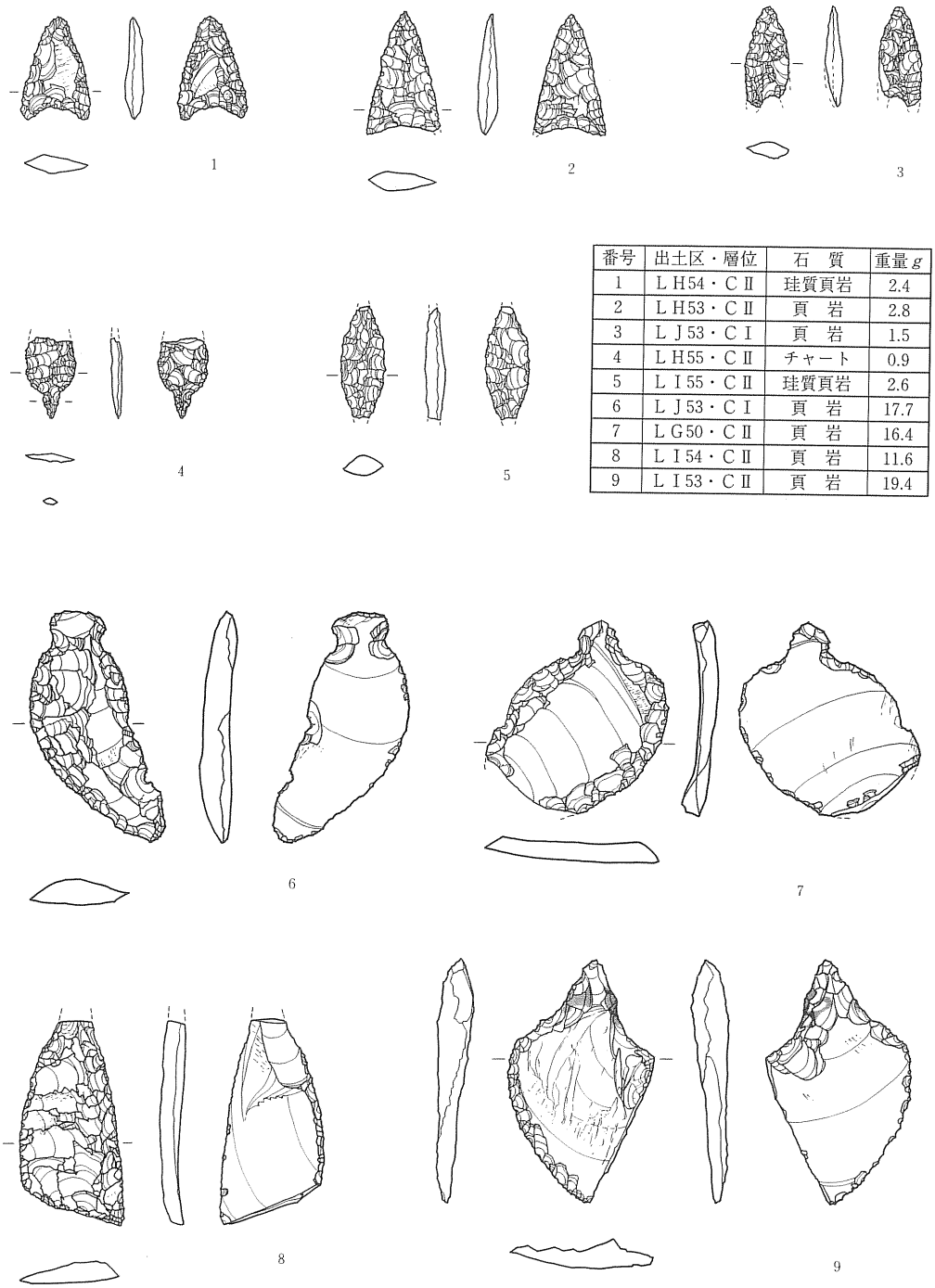
扁平打製石器（第20図19～23）

５点出土している。いずれも扁平で細長い河原石を利用して、その縁辺に調整を加えている。短辺の両方ないし一方がえぐれるものがある。

19・21は、短辺に１～２度の大きな打ち欠きを、長辺の一方にも打ち欠きを施し、さらに擦りこんで平坦にしている。

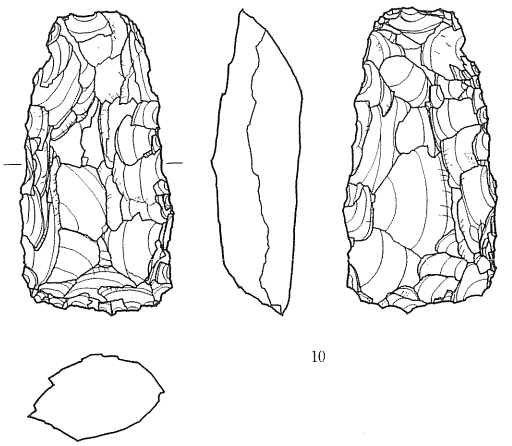
20・22は、周辺に両面から打ち欠きを施し、長辺の一方を平坦になるまで擦りこんでいる。

23は、周辺に不連続の打ち欠きを施しているもので、長辺の一方には両面から打ち欠きを施し、直線的な一辺をつくり出している。

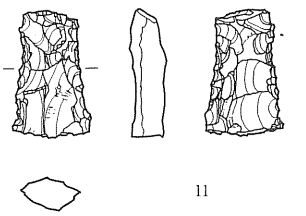


番号	出土区・層位	石　質	重量 g
1	ＬＨ54・ＣⅡ	珪質頁岩	2.4
2	ＬＨ53・ＣⅡ	頁　岩	2.8
3	ＬＪ53・ＣⅠ	頁　岩	1.5
4	ＬＨ55・ＣⅡ	チャート	0.9
5	ＬＩ55・ＣⅡ	珪質頁岩	2.6
6	ＬＪ53・ＣⅠ	頁　岩	17.7
7	ＬＧ50・ＣⅡ	頁　岩	16.4
8	ＬＩ54・ＣⅡ	頁　岩	11.6
9	ＬＩ53・ＣⅡ	頁　岩	19.4

第17図　出土遺物 ―石器１―

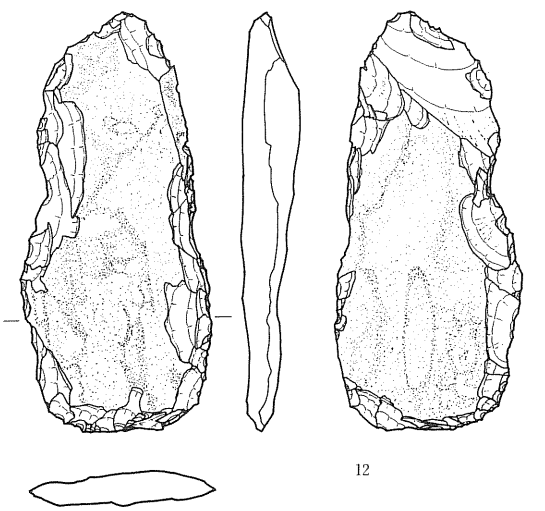


10

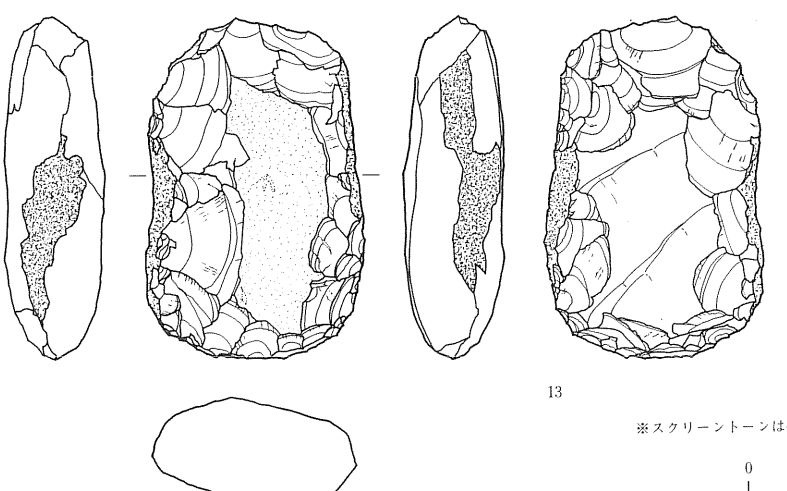


11

番号	出土区・層位	石　質	重量 g
10	ＬＧ46・ＣⅡ	頁　岩	72.8
11	ＬＩ53・ＣＩ	頁　岩	77.8
12	ＬＨ53・ＣⅡ	頁　岩	6.8
13	ＬＧ51・ＣＩ	頁　岩	164.2



12

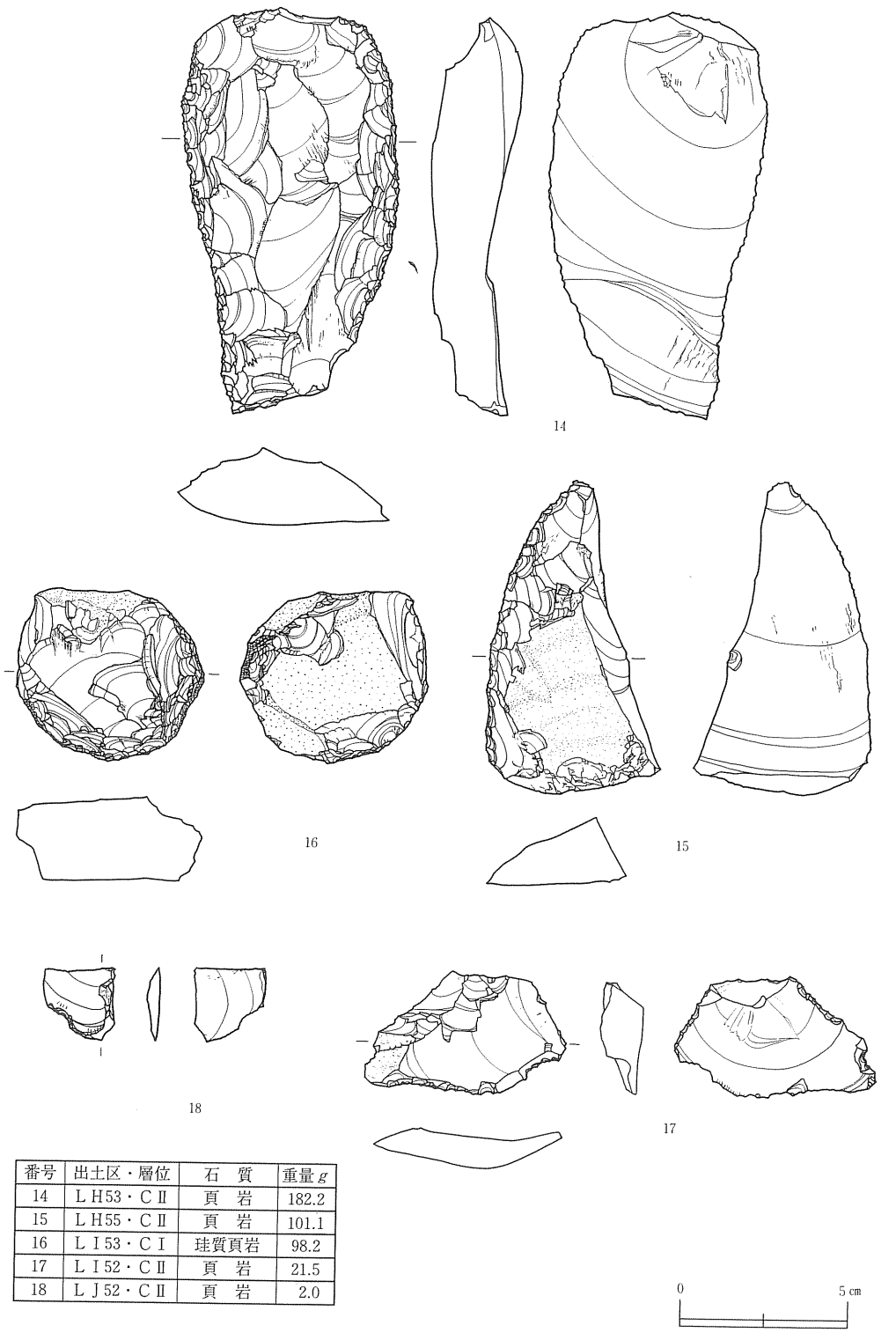


13

※スクリーントーンは擦り面

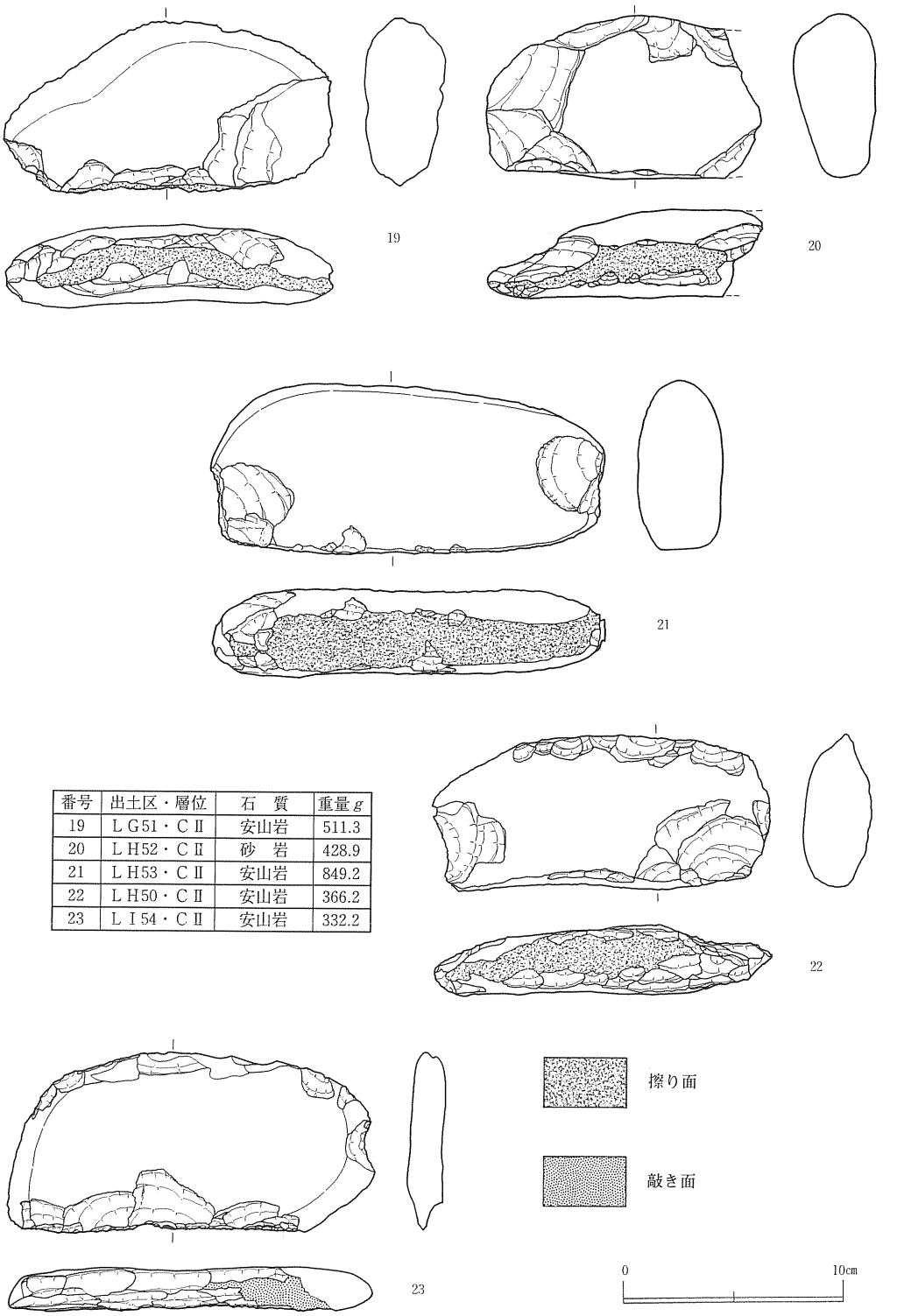
0　5㎝

第18図　出土遺物 ― 石器２ ―



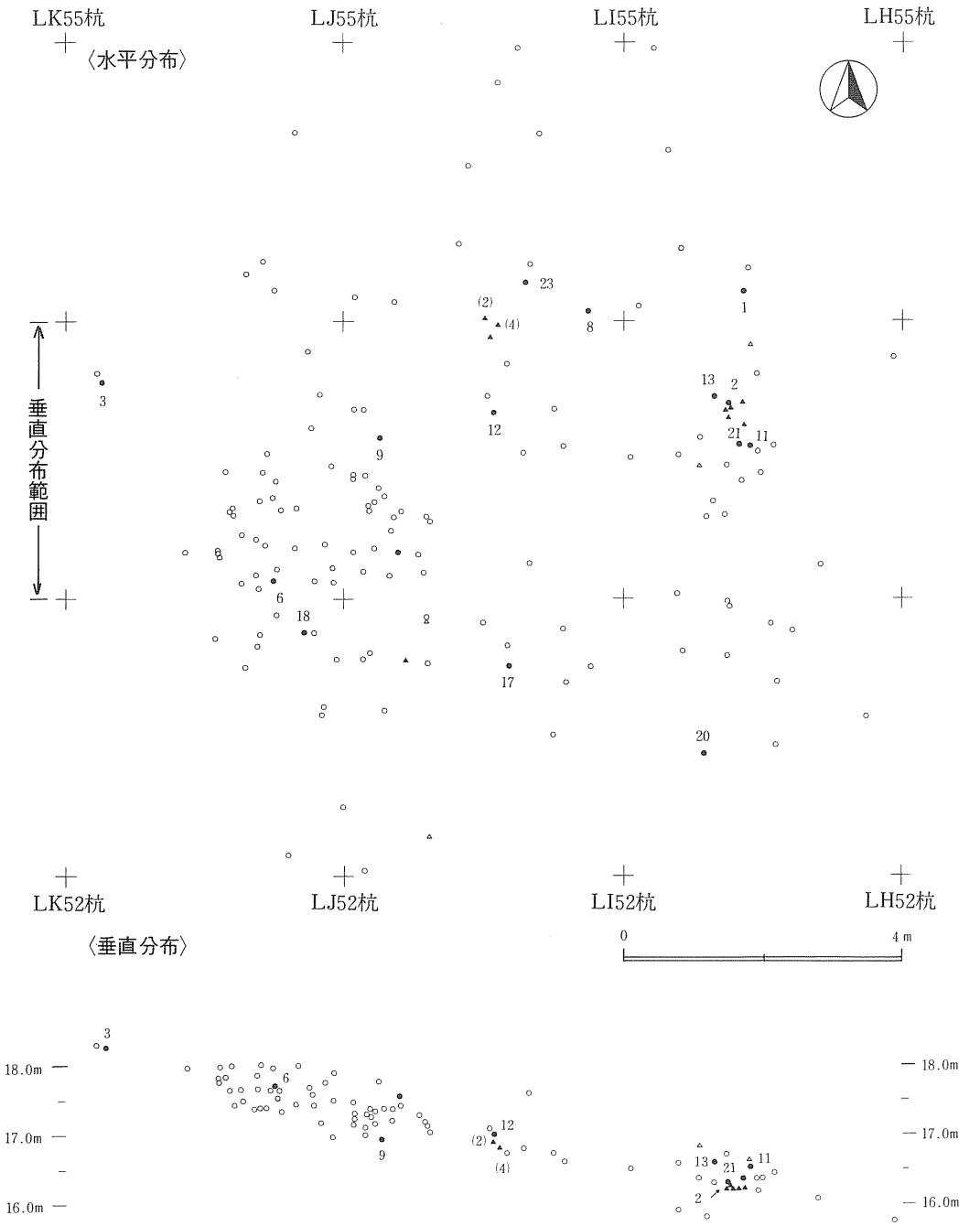
番号	出土区・層位	石　質	重量 g
14	L H53・C Ⅱ	頁　岩	182.2
15	L H55・C Ⅱ	頁　岩	101.1
16	L I 53・C I	珪質頁岩	98.2
17	L I 52・C Ⅱ	頁　岩	21.5
18	L J 52・C Ⅱ	頁　岩	2.0

第19図　出土遺物 ― 石器 3 ―



番号	出土区・層位	石　質	重量g
19	ＬＧ51・ＣⅡ	安山岩	511.3
20	ＬＨ52・ＣⅡ	砂　岩	428.9
21	ＬＨ53・ＣⅡ	安山岩	849.2
22	ＬＨ50・ＣⅡ	安山岩	366.2
23	ＬＩ54・ＣⅡ	安山岩	332.2

第20図　出土遺物 ― 石器４ ―



第21図　石器類出土地点図

第3章　まとめ

松館遺跡は、既に第1章で述べたとおり、中世城館としての地形的特徴を備えており、『秋田県の中世城館』にも松館跡[1)]と紹介されていることから、当初、城館跡と見越しての調査を開始した。

しかし、調査を進めていった各地区の状況は次のとおりである。

※居住区域とみられた上面平場は、南端から北へ50cm以上の段差をもって削平が行われ、遺構・遺物は確認できなかった。

※段築が続き複数の郭面を構成するとみられた東側斜面は、現状の畑地の区画に重なるように、緩斜面に段々の切り込みがみられ、さらに地山に近い面から、縄文時代の土器・石器の他、現代のプラスチック製品・磁器・ビー玉等がみつかっている。

※裾をめぐる帯郭にみられた西北側の細長い平場は、10cm前後で灰白色粘土に達し、空堀・柵といった遺構は検出されなかった。

※堀切とみられた北側の切り通しは、下に幅3m程の平坦面が続き、昭和30年代までトロッコ道として機能していたものである。

以上のように調査区内で城館跡に関連する遺構・遺物が全くみられず、縄文前期の土器・石器が出土したのみであった。当初、中世城館跡を構成する郭面造成によると思われた地形の変容も、戦中・戦後期の開墾によるものと判断された。したがってここでは、遺構として4基検出された火葬墓について考察し、まとめとしたい。

－火葬墓群－

4基の火葬墓について、立地・形態等で次のような特徴を上げることができる。

※見通しのよい、南端部にまとまって検出された。

※自然の高台にあり、墳丘を築いたものではない。

※1・3号のように炭のまとまりとして確認されたものと、2・4号のように掘り込みの比較的深い穴の中から、炭と骨が混じっている状況で確認されたものがある。

※いずれも他の場所にあると思われる荼毘所から、収骨して埋葬しているものである。

※骨蔵器、副葬品がみつかっていない。

骨蔵器、副葬品がないこと等で、年代を決定する手がかりがないが、県内の諸例を比較することで年代を推定したい。

秋田市金足潟向Ⅰ遺跡[2)]と南外村小出Ⅰ遺跡[3)]では、骨蔵器を伴う火葬墓群が検出されており、骨蔵器のまわりに炭をめぐらすのを特徴としている。潟向Ⅰ遺跡ではロクロ成形による赤焼土器を、小出Ⅰ遺跡ではロクロ成形による赤焼土器と須恵器を骨蔵器としており、平安時代後半

の年代が考えられる。

秋田市後城遺跡[4]では、骨蔵器を伴わず、掘り込みをもつ土壙墓が20基検出されている。大部分の掘り込み内から焼土・炭に混じって骨片がみつかっていることで、火葬墓と考えられる。埋葬方法としては、荼毘所から焼土・炭と共に骨が移されて埋葬されたものと推測される。なお堀り込みが方形あるいは長方形を呈するものの他に、直径70cm前後の円形を呈するものがあり、形態的に松館遺跡の第1号・第3号火葬墓に類似した一群がある。土壙墓の年代については副葬品の古銭、伴出した陶器から14世紀～15世紀を中心とした年代が考えられている。

こうした三遺跡の比較から、骨蔵器を伴わず、炭と共に骨を納める埋葬方法をとる、松館遺跡の火葬墓群については、中世以降の年代[5]が考えられる。

註1　秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第149集 1981（昭和56年）
切り通しの北側、丘陵頂上部が主郭になる可能性を指摘している。

註2　庄内昭男 「秋田県の古代・中世の火葬墓 」『秋田県立博物館研究報告第9号』 1984(昭和59年)

註3　秋田県教育委員会　小出Ⅰ遺跡発掘調査略報　1988(昭和63年)

註4　秋田市教育委員会『後城遺跡発掘調査報告書』1980(昭和56年)

註5　川崎利夫「山形県に於ける古代・中世の火葬墓について」『東北考古学の諸問題』 1976(昭和51年)
発見例の多い山形県の火葬墓について、埋葬様式を①～⑤に分類しており、火葬骨を直接地下に埋葬し、何らの施設も持たないものを⑤とし、室町時代後葉から江戸時代初期に対比している。

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

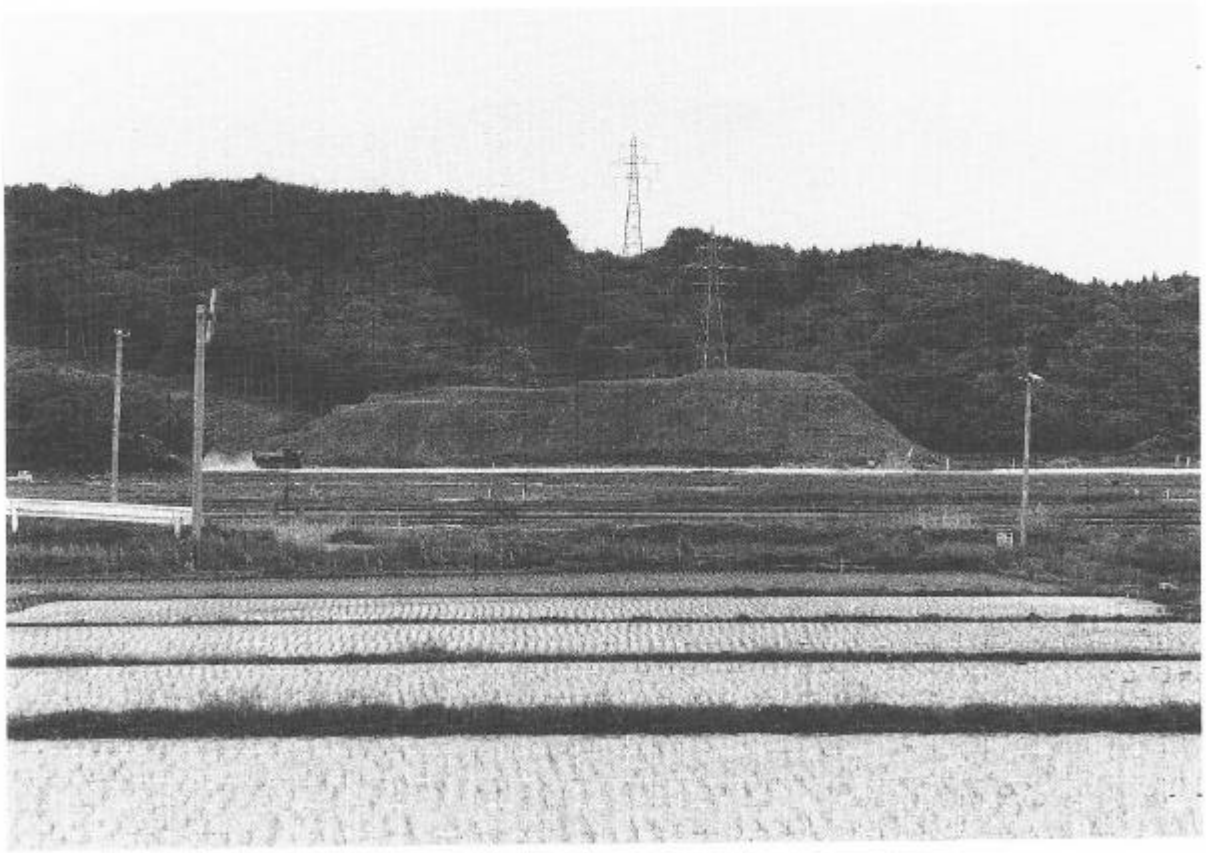
1990年8月20日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。 なお年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差σにもとずいて算出した年数で、標準偏差（ONE　SIGMA）に相当する年代です。
また試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限の年代値（B.P）として表示してあります。また試料のβ線計数率と現在の標準炭素（MODERN　STANDARD CARBON）についての計数率との差が2σ以下のときには、Modernと表示し、σ^{14}C％を付記してあります。

記

Code　No.	試料	年代（1950年よりの年数）
GaK－15126	Charcoal　from　松館遺跡 5MD　SK　23	1160　±　80 A．D　790
GaK－15127	Charcoal　from　松館遺跡 5MD　SK　01	970　±　80 A．D　980

図版1

遺跡遠景（南▷北）



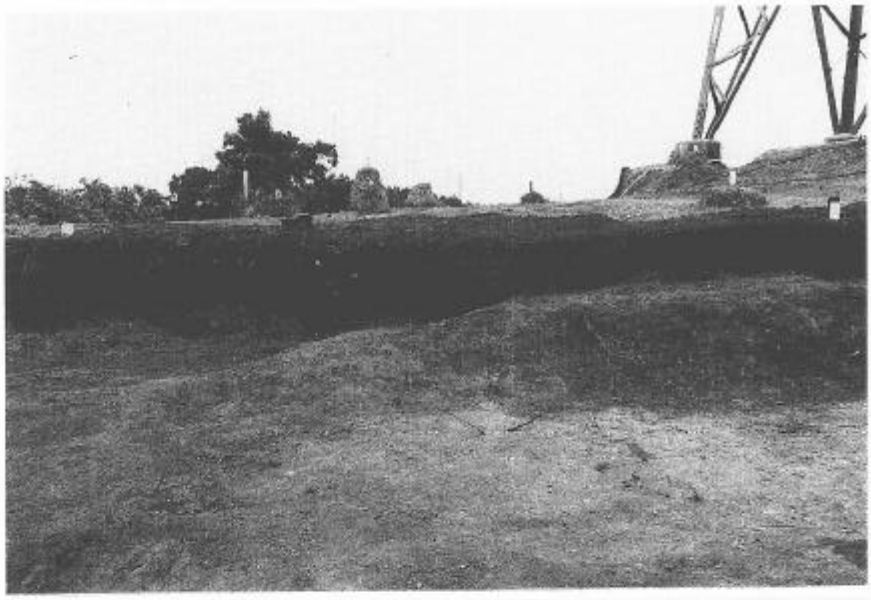
遺跡遠景（西▷東）

図版2

調査前の状況（北▷南）

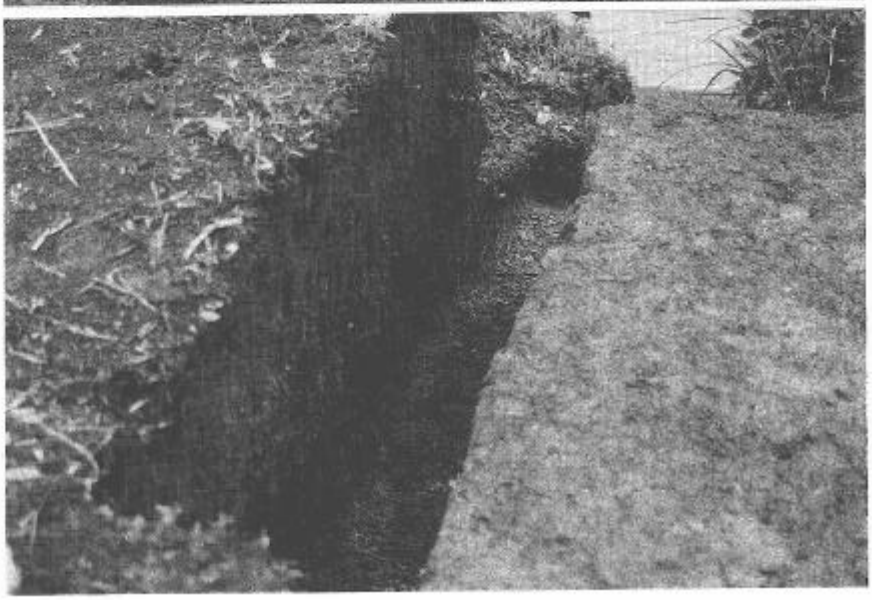
調査後の状況（北▷南）

図版3



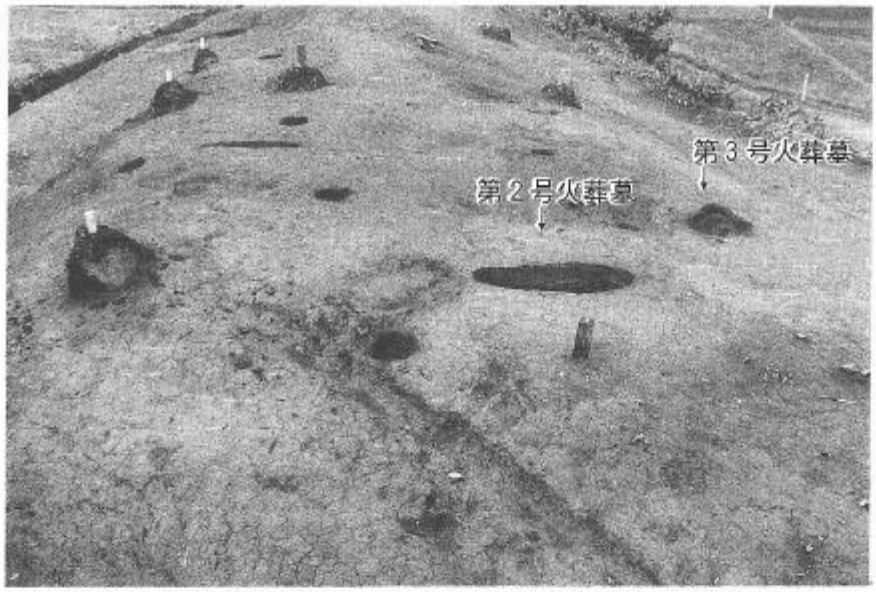
東西土層
MA50グリッド
付近
（北▷南）

調査区東斜面
調査状況
※段は畑地用
に削平された。
（南▷北）

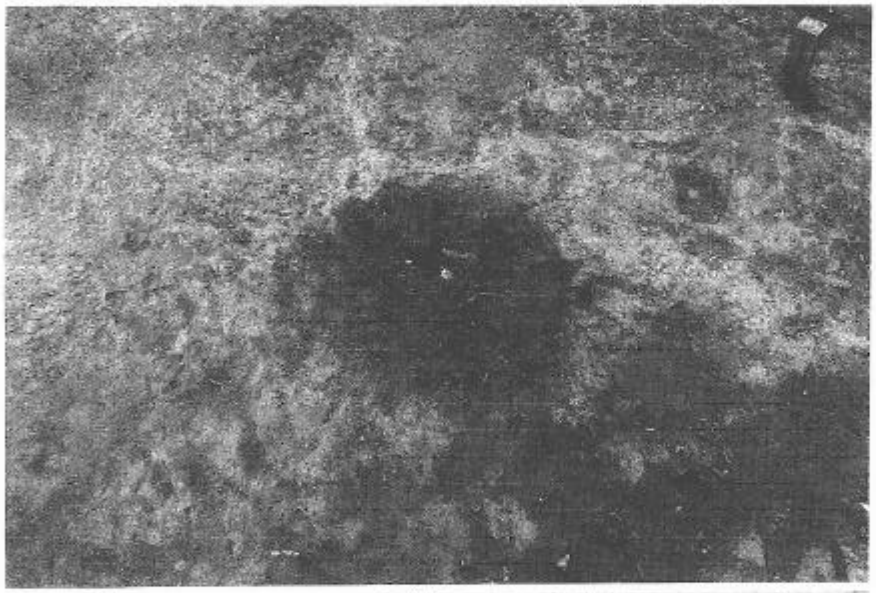


MC35グリッド
トレンチ
（東▷西）

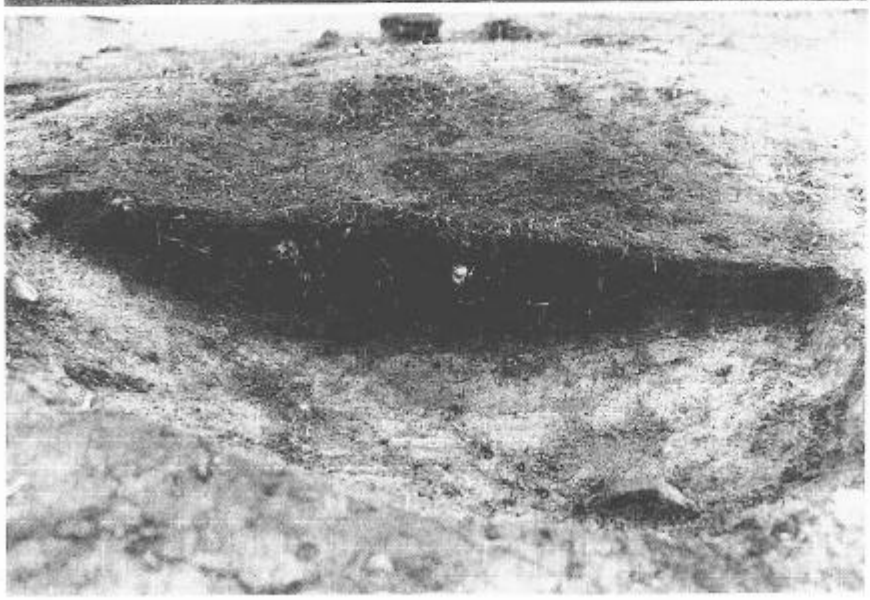
図版4



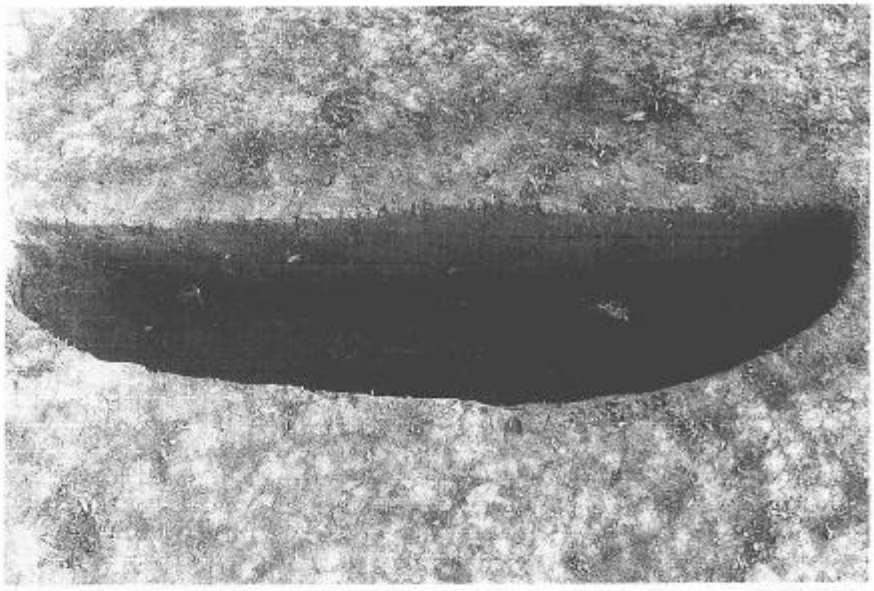
南端火葬墓群
発掘状況
（北▷南）



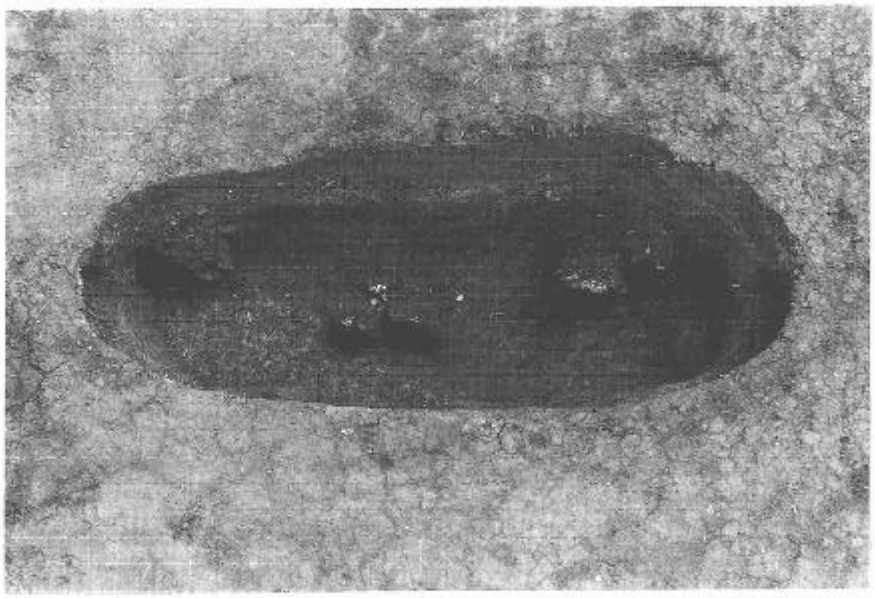
第1号火葬墓
確認状況
（北▷南）



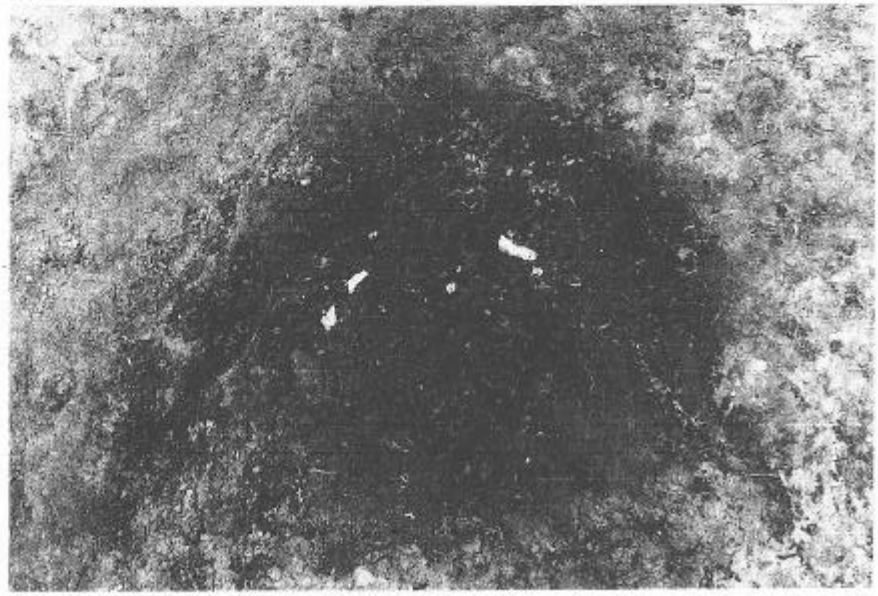
第1号火葬墓
断面
（北▷南）



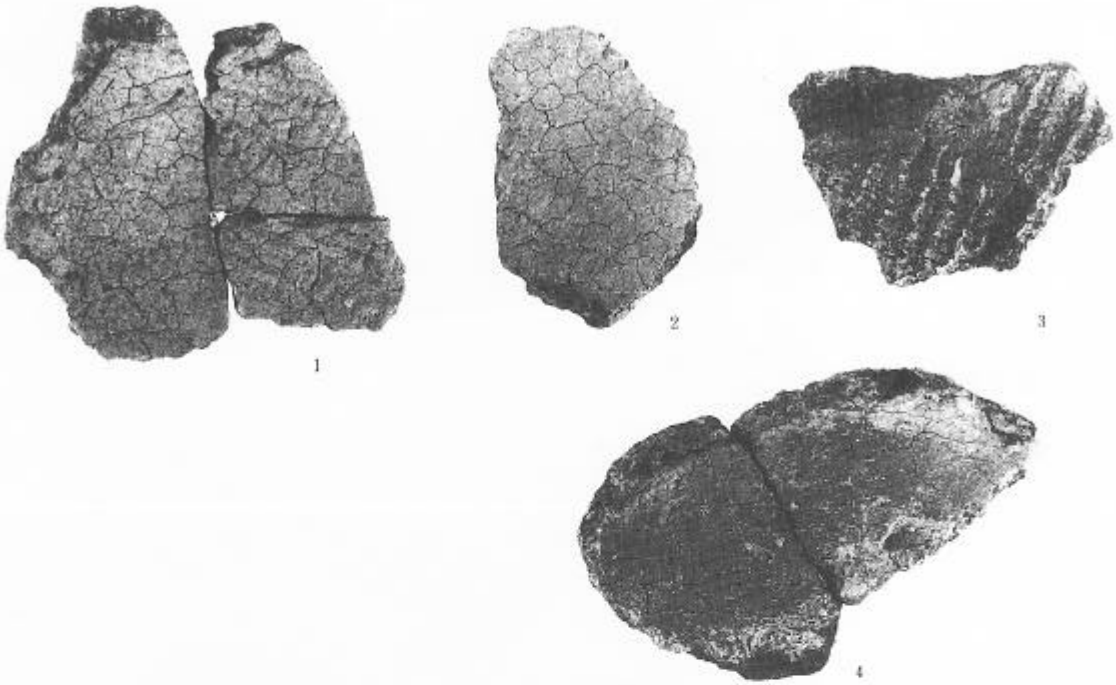
第２号火葬墓
断面
（北▷南）



第２号火葬墓
完掘状況
（北▷南）

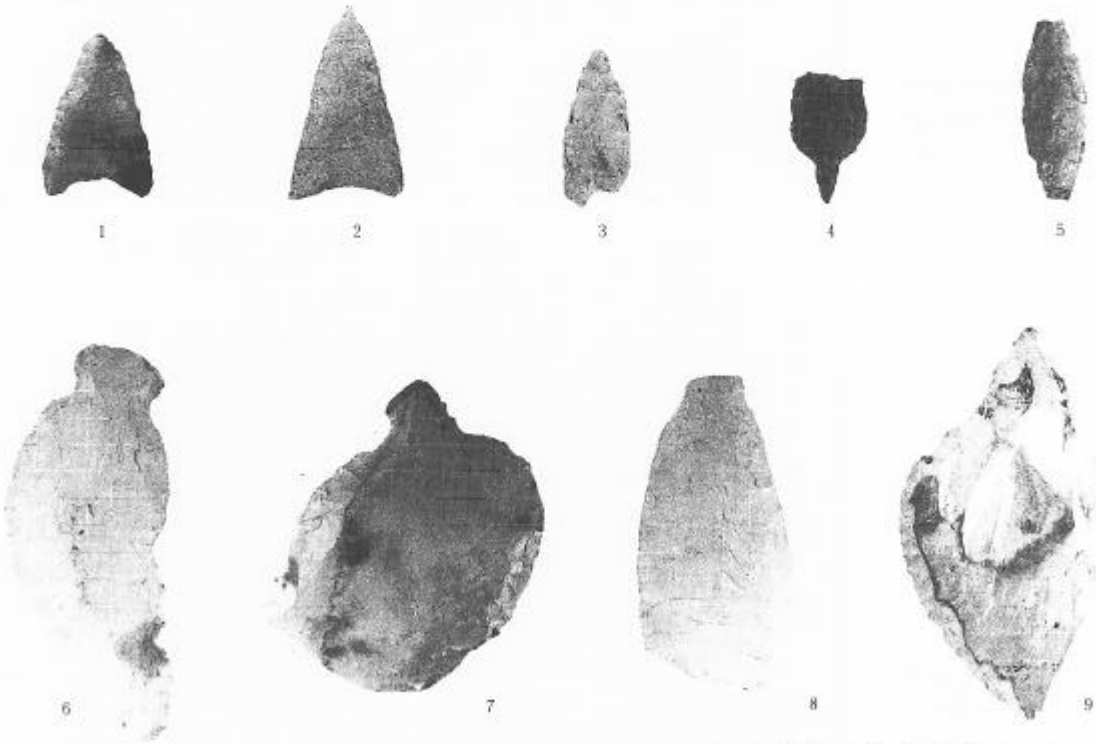


第３号火葬墓
確認状況
（北▷南）



〈土器1/3〉

※数字は拓影番号と一致



〈石鏃・石匙2/3〉

※数字は実測図番号と一致

出土遺物　―土器・石器―

10

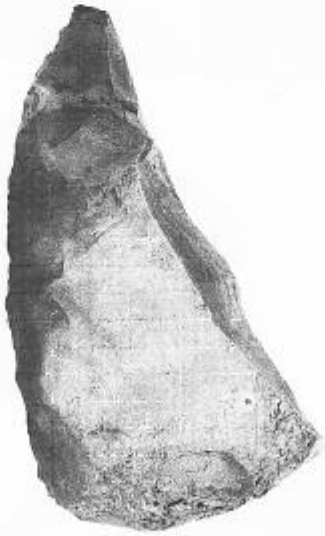
11

12

13

〈石箆・打製石斧1/2〉

14


15

16

17

18

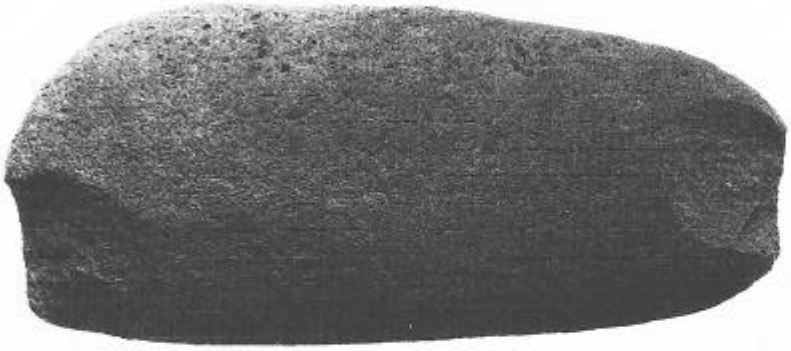
〈剥片石器1/2〉

※数字は実測図番号と一致

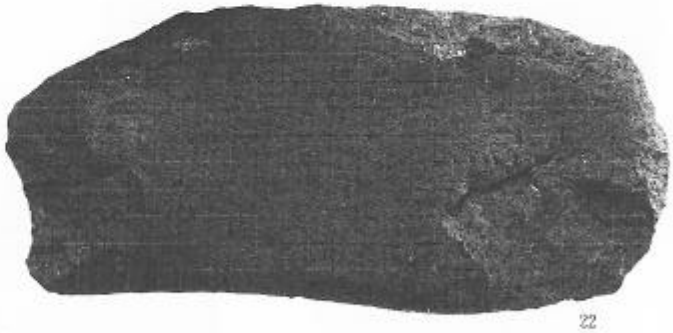
出土遺物　―石器―

19

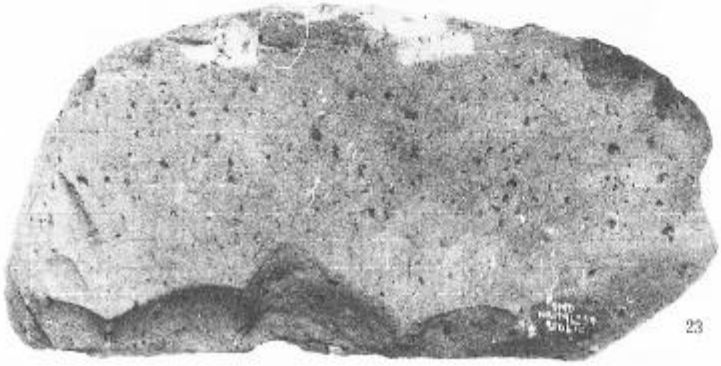
20



21



22



23

〈扁平打製石器1/3〉

※数字は実測図番号と一致

出土遺物　―石器―